

## 基調講演

## 高大接続の「セグメント化」と探究学習の意味

松下 佳代（京都大学 大学院 教育学研究科 教授）



ご紹介にあずかり、ありがとうございます。皆さん、おはようございます。私は京都大学教育学研究科の松下佳代と申します。2022年9月末までは京都大学の高等教育研究開発推進センターというところにおりまして、先ほどご紹介のあった溝上さんは元同僚でしたが、高等教育研究開発推進センターが廃止されて、今は教育学研究科で活動しております。今日は、先ほど長谷川先生から既にご紹介がございましたが、日本学術会議でセグメント化ということをおっしゃって、それが何を意味するのかということと、それから探究学習が高大接続を考える上でどのような意味があるのかをお話ししていきたいと思っております。自己紹介は、先ほど詳しくさせていただきましたので、飛ばそうと思っております。

（スライド3） 本日は、高大連携教育フォーラムの場ではありますが、高大接続に絞ってお話をさせていただこうと思っております。従来、高大接続の議論では2つの教育段階、つまり高校と大学が異質な教育機関であることを前提に、両者をいかにつなぐかが課題とされてきました。

2000年代の初め頃まではそうだったと思います。しかし現在では、大学の高校化、そして他方で高校の大学化が進んで、両者の異質性は依然として残ってはいるものの、各セグメント間の違いが拡大しているように見えます。セグメントの意味が分かりにくいと思いますが、後でご説明します。この状況において、探究学習がどのような意味を持つかを考えたいと思っております。本講演では幾つか事例を挙げながらセグメント化が進む高大接続の状況と、そこでの探究学習の意味について考えていきます。先ほど、このフォーラムは事例研究をやるというお話がありましたが、私もできるだけ具体的な事例を挙げながらお話ししていきたいと思っております。

（スライド4） 本日、私が使用する資料は、冊子になっているものと、今日、お配りしている「松下資料」というカラーの資料です。「参考」と書いてあるところが、今回、新たに資料として追加した部分です。少し具体的な話を入れた方がいいかと思ひまして、直前に入れさせていただいたので、この2つを組み合わせさせていただきます。

（スライド5、6） 高大接続を巡る状況ですが、高大接続と高大連携はどう違うのかをまず確認しておきたいと思っております。よく似ている言葉ですが、高大連携はまさに高校と大学が連携して、高校教育および大学教育の改善や充実に資する取り組みのことです。一方、高大接続とは、高校と大学を区切ることとつなぐことで

す。接続は英語だとアーティキュレーションと言われますが、このアーティキュレーションには、辞書を引くと「関節」という意味もあります。関節は、切れているけれども、そこでつながりますよね。そういう意味があります。つまり区切ること、非連続性と、つなぐこと、連続性の両面を持ちつつ、学習者の移行、トランジションを促すことが高大接続です。人生には様々なトランジションがあるわけですが、その1つの大きなものが高校から大学への移行、トランジションとなります。先ほど長谷川先生がお示くださったとおり、日本学術会議の心理学・教育学委員会に置かれた高大接続を考える分科会が2023年にこの報告を出しました。これはPDFで公開されていますので、どなたでもお読みいただけます。当時、私はこの分科会の副委員長を務めておりまして、報告の作成にはかなり深く関わりました。

(スライド7) この内容を少しご紹介したいと思います。まず、なぜ高大接続が問題化してきたのかということです。これは、ここにおられる皆さんには改めてお話しするまでもないかと思いますが、大学がユニバーサル化してきて、学校システムの構造変化が生じたということです。小学校・中学校・高校・大学という形で1960年と2022年を比べますと、1960年段階ではピラミッド型になっていたのが、2022年段階には台形の形になりました。後のスライドでもお話ししますが、ピラミッド型のときには高校と大学は異質な教育機関であったと思います。ところが台形になってくると、大学の学校化、学生の生徒化という現象が生じてきました。

(スライド8) それをもたらした大学のユニバーサル化が何を意味するかということですが、これは日本だけではなく世界的にも現れている現象です。大学進学率によって大学教育の質が変わることは、1970年代半ばに、既にマーチン・トロウが予測していました。それが、その後、世界各国で実際に起こり、予測が現実とな

りました。1970年半ばにマス段階に到達していたのはアメリカだけでしたが、その後、他の国々も、マス化、ユニバーサル化していきました。エリート型のときは、高等教育は少数者の特権だったのが、50%を超えるとマジョリティになります。もちろん、高校を卒業して就職する人もいれば、専門学校に行く人もいます。高等教育というと日本では専門学校も含まれますが、ここでは大学がメインになっています。大学進学率が50%を超えると、大学に進学するのがデフォルトのような状況になってくるわけです。万人の義務というのは強い表現ですが、大学進学がデフォルトになると、様々な学生が大学に入ってきます。こうした中で、先ほど述べたように学校システムの構造がピラミッド型から台形型へと変わってきたということになります。

(スライド9) この変化を見越して、1990年代後半頃から高大接続に関する政策が次々に打ち出されてきました。そこでは教育改革も含めた接続が志向されていました。これは皆さんもご存じかと思いますが、2014年には高大接続答申が出されています。11月に学習指導要領の諮問が出され、12月に接続答申が出されました。このときの答申のタイトルは「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」でした。このように当初は三位一体で改革していくということでしたが、入学者選抜についてかなり大きな改革案が示されたこともあり、次第に入学者選抜の改革に焦点化されていきました。

2016年に高大接続システム改革会議の最終報告が出た後、2021年には大学入試のあり方について提言が出されました。結論としては、当初、案として出されていた、業者が行う英語のテストを入試にも活用したり記述型の問題を入れるといったことはかなりトーンダウンし、それぞれの大学が個別の入学者選抜の中で必要に応じて活用することになりました。

(スライド10) 高大接続改革の議論では、このように教育内容や方法を含めた三位一体の改革が入学者選抜に特化・焦点化されていったわけですが、今日のテーマである探究学習などが非常に重視されるようになる中で、教育接続について改めて考えるべき時期にきています。この教育接続は、大学入試センターにおられた荒井克弘先生が、2005年に提唱された言葉です。入学者選抜だけではなく、教育内容や方法、学力・能力等も含め、高校と大学を接続させようとする考え方として定義されています。これは、ユニバーサル段階での高大接続のあり方を示したものだ、とすることができます。

これは先ほどの図ですが、この図に示したように、1960年段階では高大接続は一部の人の問題で、10%にも満たない状況です。なおかつ入試のみで接続が図られていたわけですから、「点」の接続です。そこから、50%を超える人たちが大学に進学するようになって、高校と入学者選抜と大学を三位一体で接続を考えると、つまり「面」の接続が求められるようになったわけです。

(スライド11、12) 教育接続についての取り組みは、大きく2つに分けられます。1つは、高校から大学への移行期に焦点化した、大学生向けの教育プログラムです。今日、参加されている方は、高校関係者と大学関係者がほぼ半々くらいですが、大学生向けに行われているプログラムとしては、大学1年生に対する初年次教育、リメディアル教育、そして入学決定者に対する入学前教育があります。入学前教育は、まだ大学生になっていないが大学生になることが決まった人たちに対して、大学側が提供する教育です。

もう一つは、大学の学びの先取的性格を持つ、高校生向けの教育プログラムです。SSH(スーパーサイエンスハイスクール)やSGH(スーパーグローバルハイスクール)などがあります。IBDP(国際バカロレア・ディプロマ・プログラム)は、日本では高校2年生、3年生を対

象に行われていますが、内容的には大学の教養教育に近い高度な中身になっていると思います。そして、高校生向けの学問体験プログラムも様々な大学で行われています。京都大学では、「ELCAS」というものがあります。こういったプログラムを様々な大学が提供しています。



(スライド13) では、高大接続のセグメント化とはどういうことでしょうか。セグメント化とは、細分化して断片になっていくということです。高大接続の「セグメント化」は、先ほどの学術会議の報告の中で初めて使った言葉ですが、教育内容や選抜方法、学習者の社会的属性などによって、高校から大学への学習者の移行パターンが細かく分かれて、多様な高大接続が並存するようになった状況を指します。以前、共通一次試験が始まった際に、これまでよりも受験生が細かく分けられるようになった、1,000点刻みになったと言われましたが、あのときは入試だけです。ここで申し上げているのは、高校と入学者選抜と大学をつなぐような形でセグメント化が進んでいるということです。これは、さまざまな格差、例えば社会階層間の格差、地域間の格差、ジェンダー間の格差とも連動しています。それから、接続の際に円滑でスムーズな移行を求める傾向が強くなっています。つまり、引っかかったりすることなく高校と大学をつなげていくという発想です。これは、入学者選抜の前倒しや学生の囲い込みにもつながっています。

(スライド14) ユニバーサル化以前は、2つの異質な教育段階が存在して、両者をどのようにつなぐかが課題でした。ところが、ユニバーサル化が進み、なおかつ日本の場合には18歳人口が大きく減少するなかで、これまでは大学進学率の上昇、あるいは医療系の専門学校が大学になったり、短期大学が大学になったりで大学入学者数は徐々に増加してきたのですが、2026年以降はついに大学入学者数も減少に転じ、さらに2035年からは一気に減少していきます。そのような状況で、いかに自分の大学に高校生を呼び寄せるかがどの大学にとっても死活問題になっているわけです。これまでは、高校教育、入学者選抜、大学教育と縦に並んでいたのが、横にスライスされる感じでルートが断片化され、エリート大学を目指す進学校では高校の大学化が生じています。それから、あまり使いたくない言葉ですが、Fランクの大学では支援体制を充実させ、求めるレベルも下げて、大学の高校化が進んでいる状況になっています。

(スライド15) このような高大接続のセグメント化の中で、今、申し上げた2つのことが同時進行しています。大学の高校化では、学業水準が引き下げられ、学業面や生活面でのケアやサービスが非常に綿密に行われるようになってきています。高校の大学化では、探究活動が非常に高度化していった、幾つかの高校の探究を見ますと、大学の研究に近いようなものもあります。大学の先生や大学院生などの指導を受けながら探究活動を行い、ときには学会発表まで行っているような生徒もいます。現在は、このような大学の高校化と高校の大学化が同時進行している状況といえます。この背景として、一つには、今、申し上げた、18歳人口の減少による入学者獲得競争と、もう一つには高大接続改革があります。

これまで私学の附属高校は、入学者選抜をほとんど経ることなく、大学とつながっていたわけですね。今は私学だけではなくて、奈良

女子大学の例のように、国立大学でも附属の中等教育学校と大学をつないでいるところがあります。高校には高大接続コースがあり、そこでは大学教員と高校教員が協働でそのコースを作っておられます。前倒しのような高校の大学化があって、一緒にカリキュラム開発を行い、高大接続入試を受けて大学に入る仕組みになっているわけです。私学の高校には、〇〇大学コースといったものを設けているところもありますよね。そういうふうにして、大学と高校がつながるといことが、附属高校以外の高校にも広がってきています。

(スライド16) 先ほどの学術会議の報告と一緒に作った中村高康さんは、入学者選抜も「エリート選抜」と「マス選抜」に分かれていると述べられています。これも、会場の皆さんもよくよくご存じのことかと思います。スライドでは国立と私立で分けていますが、選抜方法に違いがあります。「エリート選抜」と言われるものは、高等教育のエリート段階において支配的で、かつエリート層を念頭に置いた選抜方法だと中村さんは述べています。これは主に一般選抜、あるいはAO入試でも学力型のAO入試になります。京都大学の場合ですと特色入試です。それから、もう一つの「マス選抜」は、高等教育の大衆化を含む教育拡大の圧力によって生み出されました。必ずしもエリート層とは言えない学生を念頭に置いた選抜であると中村さんは述べています。マス選抜でも一般選抜はありますが、2科目あるいは3科目と科目数が非常に少ないです。そして、学校推薦型選抜や総合型選抜がかなり多くなっています。このように入学者選抜の方法も分化しているわけです。

(スライド17) これも皆さん、ご存じかと思いますが、高大接続において格差の拡大が見られます。教育社会学の研究では、母親の学歴によって社会階層を見ることがよく行われますが、母親の学歴が高いほど大学進学率が高くなります。また、経済格差でいうと、世帯収入が

多いほど大学進学率が高くなります。

(スライド18) これもよく目にするデータかと思いますが、ジェンダー間格差と地域間格差です。この格差は驚くほど大きく、東京都の女性の進学率と鹿児島県の女性の進学率を比べると、鹿児島県の女性の進学率はほぼ半分程度です。どこに、どのような性で生まれるかによって、与えられる機会がこれほどまでに異なるということが本当によく分かります。

(スライド19、20) 以上の点を踏まえ、今回のテーマである「モヤモヤ」を私なりにまとめてみますと、一つ目はセグメント化の現状にどう対処すべきかです。セグメント化は避けられない前提なのか、それとも克服すべき問題状況なのかということです。これは、本当に大きなテーマだと思います。先ほど、引用してくださったように、学会の報告の中でも、セグメント化の進行によって、高校教育、大学教育、それぞれのコアがなくなってきていて、社会的な格差が拡大してきているということを指摘しています。これを克服すべき問題状況としてとらえるのであれば、私たちに何ができるのだろうかということです。

もう一つの「モヤモヤ」は、現在の移行支援がこれでよいのかということです。先ほども述べましたように、現在の移行支援は円滑な移行や前倒し、囲い込みとなっています。移行において落ちこぼれたり、問題が生じたりしないようにできるだけ円滑にスムーズに移行させようとしています。ですが、私は、移行に伴う葛藤や不安は学生の成長にとって意味のあるものにもなるのではないかと考えています。小学校を卒業して中学校、中学校から高校、高校から大学という区切りがあって、その区切りが、もう一度、自分の人生を捉え直し、デザインし直す機会になっています。移行で知らないところに行くと、最初は、友だちができるだろうか、この環境でやっていけるだろうかと不安になりますが、それを乗り越えることによって一回り大きく成長して

いきます。そこを全部、円滑な移行という方向を目指すだけでいいのかということです。もちろん、移行がうまくいなくて、大学に通えなくなってしまう場合もあるのでサポートは必要ですが、目指す方向としてこれでいいのかという点を、「モヤモヤ2」としてお示ししておこうと思います。

(スライド21、22) さて、今日の講演は大きく二題話になっていまして、続いてもう一つの探究学習のお話に入りたいと思います。そもそも探究学習とは何なのか。京都大学の楠見(孝)先生は、「自ら問題を発見し、調査・観察・実験などによって事実を明らかにし、事実に基づいて論理的・批判的な思考・判断を行い、導いた結論を表現したり、問題を解決したりする学習活動」と定義しておられます。苫野一徳さんは、「自分たちなりの問いを立てて、自分たちなりの仕方で、自分たちなりの答えにたどり着く学び」であり、出来合いの問いと答えを決められた時間、決められた仕方でやる学びとは違う、とまとめておられます。一見するとこの2つはかなり異なるように見えますが、結構似ているとも思います。つまり、自分で問いを立てて、何らかの結論や答え、あるいは提案などに導いていく、やり方は様々あるが、そこは自分たちで選んでいくということです。

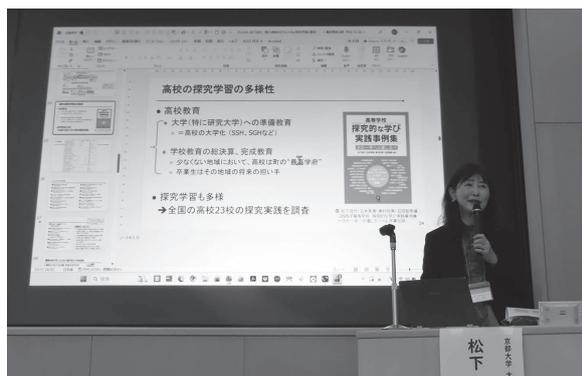
(スライド23) 今の学習指導要領では探究が、教科と総合の両方で入ってきていますよね。この図では、青いところが教科の探究、赤いところが総合的な探究を表しています。今回は総合的な探究の時間に焦点化してお話しします。

(スライド24) 今までいろいろな高校の探究学習を見てきましたが、探究学習は本当に多様です。それは高校教育に大きく2つの性格があることから来ています。一つは、大学、特に研究大学への準備教育という性格です。高校の大学化というのは、特にこのところで生じています。もう一つは、学校教育の総決算、完成教育という性格です。

今回、京都大学教育方法学研究室の院生やOBで、いろいろな高校を調査して、『高等学校 探究的な学び実践事例集』という本を刊行しました。その際、印象的だったのが「あの高校は、うちの町の最高学府なんです」という言葉でした。高校は町の誇りであり、この最高学府を出て、これから自分たちの地域を築いていってくれる人をいかに育てるかを地域ぐるみで行っている、そういう高校がたくさんあることを感じました。

(スライド25) このスライドでは私たちが調査した23の高校を挙げています。全部は読み上げませんが、北海道から九州まであります。近畿地区が一番多くなっていますが、私たちが何らかのつながりを持っていた高校にお願いをしましたので、このような分布になってしまいました。全国のさまざまな高校が、自分たちの学校での探究はどうあるべきかを模索しながら実践しておられることが本当によく分かりました。

(スライド26) 今回、各事例校の探究の特徴をみんなで議論しながら、それを表すキャッチフレーズのようなものを作りました。例えば、「教育で未来を創る町、鹿追町の挑戦」。鹿追町は北海道の十勝平野にあります。自分たちの町の最高学府である鹿追高校が学校存続の危機に陥ったときに、鹿追創生プロジェクトが立ち上がり、地域が一丸となって鹿追高校の探究学習に参画する仕組みが創られました。全ての事例を紹介することはできませんが、さまざまな高校が、自分たちの学校らしい探究を模索しながら実践しておられます。



(スライド27) 探究のスタイルをまとめてみますと、本格的な学問・科学研究を遂行する探究もあれば、地域と連携したり、地域の課題解決に参画したりする探究もあります。そのほか、地域に限らず社会問題の解決や究明に取り組む探究、企業との共同開発を行う探究、自身が関心を持つテーマをとことん調べていく探究、自分の生き方に向き合う探究、農業・水産・美術など専門高校・専門学科の強みを活かして行う探究、さらに特定の理論に根ざして展開する探究など、さまざまなスタイルがあることが見えてきました。私たちがこの本を編んだ一番の目的は、それぞれの高校が自分たちの目指す探究とは何か、次に自分たちはどうするかを考えるときの参考にしていただきたいということでした。

(スライド28) ただ、多様性の一方で、共通点も抽出できそうに思います。探究のスタイルの違いは何によって生まれているかということ、3つの志向のどれに重点を置くかによって、この違いが生まれていると思います。3つの志向とは、学問(専門研究志向)、社会(社会参画志向)、そして自己(生き方探究志向)の3つです。この学問、社会、自己(学習者)というのは、カリキュラムの3つの源泉として古典的に言われてきたことなのですが、これが探究学習の場合も見られるというのは再発見でした。こうした3つの志向のどこに重きを置くかで探究学習のスタイルの違いが生まれてくるのですが、そうした違いはあれ、全ての志向がなんらかの形で有意義に編み込まれていることを感じました。例えば、先ほど挙げた鹿追高校や若狭高校、長崎県の松浦高校は、地域課題に参画しながら、自己の生き方と向き合って人間的成長を遂げることを目指しています。この場合は、社会と自己がメインですが、その中で学問的な知見や方法論なども使われています。

(スライド29) ここからは、探究実践のポイントだと思われることを6つ挙げたいと思います。1つ目は、総合と教科をどう関係づけるかで

す。教科の学びを総合探究の土台にする場合もあれば、総合探究での学びによって教科の授業や学びの様式が変容していく場合もあります。むしろ総合が教科を引っ張り上げるような形です。それから、教科と総合の共通部分に焦点を当てている場合もあります。

2つ目は、テーマと問いをどのように立ち上げるかです。これは、先生方にとっても生徒の皆さんにとっても、一番難しいと感じられるところではないかと思います。先ほど述べたように、学問的関心、社会的関心、個人的関心のどこに軸足、出発点があっても、ほかの2つも組み込んで進められます。逆にいうと、他の関心も取り入れながら、どこかにウエイトを置くような探究であってもいいと思います。そもそも、どのようにして探究、あるいは研究が生まれてくるのかというと、デューイは不確実で疑問を感じる状況や困惑・混乱から探究が始まると述べています。また、教育社会学の本田由紀さんは、怒りから生まれると言っておられます。ある生徒は、電車の中で、お母さんが自分のスマホを見て、子どもにもスマホを見せて、二人の間にはほとんど会話がないうという光景を見て、こんな育児でよいのかと感じたことから、スマホ育児について探究することにしました。つまり、問いの始まりにはこのような感情の動きがあるのです。

八王子東高校は、堀川高校から多くを学んで探究を進めておられる学校ですが、「プロットシート」と「質問シャワー」というものを使ってテーマと問いの立ち上げを行っておられます。

(スライド30) プロットシートの使い方ですが、まずマインドマップを作成し、自分がどのようなことに関心があるのかを探り、そこからテーマを立ち上げていきます。大体どんなところに関心があるか、テーマになりそうなところまで行った後でも、それだけでは探究の問い、すなわちRQ(リサーチクエスチョン)にはなりません。

そこで、質問シャワーを使って、探究にふさわし

いリサーチクエスチョンにしていきます。ある生徒は、まず「外来魚は環境にどのような影響を与えるのか」という問いを立てました。これは琵琶湖でもよく問題になりますね。この問いに対して、そもそも外来魚は何か、環境とは具体的に何を指すのか、対象とする地域や年代・時期はどこかといった質問を次々に浴びせていきます。これは生徒同士でも先生からでも可能ですが、こういった質問を浴びせることによって、よりリサーチクエスチョンらしく、ある一定の期間で結論に導けるような問いにしていくということが行われています。

(スライド31) 3つ目は、探究のノウハウをどのように教え、どのように学ぶかです。ノウハウと言うと少し軽い感じがしますが、探究の方法です。学校によってどのくらいの時間をかけるかは異なりますが、探究の型を学ぶのは大体どの学校でもある程度は入っています。これは後ほど、参考資料で示していきたいと思います。それから、ミニ探究です。例えば1学期や1年間といった大きく時間を使う探究を実施する前に、小さい探究を実施して探究の作法を経験的に学びます。さらに、先輩の探究から学んだり、取りあえず飛び込んで試行錯誤の中から学ばせることを実施されている学校もあります。これらをいくつか組み合わせる場合もあります。

4つ目は、探究実践において教師がどのような役割を果たすかです。まず、コーチやメンター、伴走者のような役割を果たすことがあります。また、先行研究者や先輩研究者の役割を果たす先生もいらっしゃいます。さらには、探究の環境整備をしたり、学校外の専門家、大学、あるいは実際にいろいろな問題に携わっておられる地域の方など、学校外とのつながりを作るハブ的存在の役割を果たす場合もあります。これら全てを果たす場合もあるかもしれません。

(スライド32) 5つ目は、探究的な学びの過

程と成果をどのように可視化して、評価をしていくかです。ここも悩んでおられるところが多いと思います。京都市立美術工芸高校では、キャリア・ポートフォリオという形で、ポートフォリオ評価を行っています。ポートフォリオ評価は、自分の学びの証拠資料をポートフォリオにエビデンスとして収め、全体を見通して学びの履歴をストーリー化する方法です。

こうしたポートフォリオを作った上で、学年末に四者面談が行われます。生徒は担任教師と美術工芸教科の先生、保護者に対して、自分の学びを発表していきます。生徒にとっては自分の学びを振り返る機会にもなっています。一般的には、ポスター発表の形式で探究発表会を行っている学校が多いかと思います。

(スライド33) こちらは、今、京都大学の教育方法学研究室で開発している「デジタル・ポートフォリオ」です。このデジタル・ポートフォリオは、Googleドライブなどに保存している資料をポートフォリオとして編集して、まるで本のように閲覧できるものです。京都大学では、教職課程などでこのデジタル・ポートフォリオを取り入れつつありますし、高校でも使ってくださっているところがあります。

(スライド34) このポートフォリオには、文字や画像のページだけでなく、URLがあるものであれば、動画も入れることができます。ページをクリックするだけでその動画が流れるようになっています。これは紙のポートフォリオにはない、デジタルならではのよさかと思います。



(スライド35) 最後に、6つ目のポイントとして、探究指導のカリキュラム・マネジメントをどのように行うかを見ていきたいと思います。これには、本当に様々な形があります。ここでは6つのパターンに分けていますが、これ以外にもあるかもしれません。まず、校長先生やミドルリーダーの教員がリーダーシップを発揮して行う場合があります。次に、教員組織で連携体制を作りながら進める場合があります。それから、学校に探究の文化が醸成されている場合もあります。例えば西条農業高校は、探究の文化が学校に浸透している感じがします。さらに、カリキュラム開発や改善の仕組みそのものを構築し、関係者で定期的なミーティングを実施するような形をとっているところもあります。それから、外部連携・協働型です。堀川高校では、大学院生のTA(ティーチングアシスタント)を効果的に使っておられますね。膳所高校も同様に、SSH(スーパーハイエンススクール)に指定されている高校は、そういうところが結構多いかと思います。最後に挙げたのは外部支援活用型です。これも多くの高校で行われていると思います。例えば、坂城高校では地域企業の協同組合が地域コーディネーター的な役割を果たしていますし、鹿追高校にはプロボノメンターという制度があります。プロボノというのは公共善という意味らしいです。鹿追高校では、公のために自分の持っている専門的なスキルや知識などを生かして貢献したいという人たちを募って、その人たちに探究に参加してもらい、生徒と一緒に伴走してもらっています。

以上、探究実践のポイントを6点にまとめてお話ししてきました。

(スライド36) さて、ここからは、本日追加した資料を使いながら、私自身の取り組みについて少しご紹介したいと思います。私は、探究を通して高大接続をする際に、「対話型論証」という取り組みをやっています。これは先ほどお話しした探究の型につながるものです。

(スライド37) 私はこれまで、小学校・中学校・高校・大学とさまざまな学校の授業や実践を見てきました。もちろん、学校段階、教科、分野によって違いはありますが、共通点もあると思いました。それが「対話型論証」です。この言葉は私の造語ですが、「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」のことです。こういうふうになると、自分の高校でも、あるいは大学でも同じような活動を行っていると思われる先生方が多いのではないのでしょうか。

(スライド38) この活動を進める上で、私たちは対話型論証モデルというものを作りました。まず、問題を設定します。教科であれば先生が問題を提示される場合が多いと思いますが、探究では生徒自身が問題を立てることが多いかと思います。その問題に対して、なんらかの結論を導きます。ひとまず結論が出てさらには探究が続くこともありますが、問題に対して何らかの答え、結論を見出そうとするところに探究があります。その結論は、様々な主張から成り立っているはずで、左側には、その主張を支える事実やデータがあり、それをどのように解釈して、どのような論拠で主張に結びつけるかという、理由づけを行います。もう一方、右側には、同じ問題に対して異なる意見を持っている人たちが大抵います。社会的な問題であればほぼ確実に対立があり、理系でも対立仮説のような形がありますよね。それに対して、なぜ対立意見ではなくて自分の主張が妥当だと言えるのかを示すために、対立意見に反駁を加えていく必要があります。こうして論証が行われるということを示したものが、このモデルです。

探究学習を通じて育てる力と関連づけると、論理的な思考、批判的な思考はこの三角ロジックの部分にありますし、意見の異なる人と対話をする中で、コミュニケーションの力が育ちます。また、自分の主張が本当に妥当かどうかを見直すことで批判的思考の育成にもなります。

そして、縦の軸は問題解決につながっていません。

(スライド39) これは、今のモデルの新しいバージョンです。現場で使ってみると、「丸では書き込みがしにくいから、四角にしてほしい」という声がありました。また、対立意見の側にも対立意見を言うだけの論拠や事実・データがあることを考えると、こちらにも同じような枠を作ったほうがいいのかということになりました。反駁については、どこに問題があるのかを示すために全体に反駁の矢印を向けています。対話型論証は、ディベートとは異なります。どこが違うかという、ディベートの場合は、相手を論破することを目指していますが、実際は対立意見から学ぶこともいろいろあります。相手からも学んで、統合的な結論・提言を作っていくことが重要です。

(スライド40) 高槻高校の例をお話しします(私が関わっていた3年前までのお話です)。高校1年ではキャリア探究として、個人で行います。対話型論証のやり方を学んでいくことも含まれています。高校2年では、グループでSDGs探究を行います。1年生のときはいろいろな文献やサイトなどを調べて自分の論を組み立てる感じでしたが、2年生ではなんらかの形で、自分でデータを集めて行います。それは、実験だったり、調査だったり、インタビューだったり、質問紙調査だったり、いろいろな方法があるわけですが、いずれにせよ自分たちでデータを集めて結論を導いていきます。

(スライド41、42) こちらは、対話型論証で探究を進めていくやり方を示した「探究チャート」です。時間が足りなくなってきましたので、ここは後でご確認いただければと思います。順番を入れてありますが、これはあくまでも参考です。実際には、行ったり来たり、あるいは同時並行的に行われたりすることがよくあります。

(スライド43、44) 最後、2月にポスター発表を行います。最初のころはA4の用紙を貼っ

ただけのポスターでしたが、最近はもう少し整ったものになってきています。今年2月の発表会で、この生徒たちは「下り階段で早足になるのはなぜか?」という問いについて探究していました。「そんなの当たり前じゃない?」と思いましたが、このグループの中の一人が以前からなぜだろうとすごく不思議に思っていたこともあり、このテーマになったのだそうです。いろいろなデータを取ったり、これは日本人だけの現象なのかということ海外のデータも取ったりして、一定の結論を導くところまで至っています。ポスターの中には対話型論証モデルが組み込まれていて、どういうロジックで論を組み立てたのかが示されています。対立仮説のようなものを挙げて、それがなぜ駄目なのかをここで反駁して、最終的な結論を導いています。

(スライド45) 高槻高校は進学校ですが、地域の中堅校と言ってもいいかと思いますが、盛岡北高校では地域課題の解決に対話型論証が使われています。三陸道にはトイレがなかったため、利用者は道の駅まで下りてトイレに行っていました。初めてトイレが設置されたという新聞記事を読んで生徒たちは「それって、どうなのだろうか」ということを考えました。地域活性化のためには、三陸道にトイレがなかったほうがかえって良かったのではないかとか、いろいろな意見が出ています。このようにして地域課題の解決などにも使われています。

(スライド46) 大学での研究とのつながりと言いますと、先ほど楠見先生の探究学習の定義でお示したように、高校の探究と大学の研究は、構造は似ていると思います。どんな問題に、どんな方法で取り組み、どんな結果になったのか、そして、その結果は何を意味していて、結論は何かという、IMRADという形式です(ちなみに、IMRADのAはアンドのAで、Dがディスカッションです)。一方、探究と研究の違いは、研究には新規性や学術的価値が必須であり、それが研究の価値を決めるという点にあります。

す。

(スライド47) 対話型論証モデルに入れますと、最初にイントロダクション、問題があって、方法があって、結果があって、考察をして、そして、そこから結論を導くという形になっています。

(スライド48、49) 時間が来ておりますが、最後に探究学習におけるモヤモヤを整理しておきたいと思います。今日、頂いた冊子を見ていて、私のは教員目線ではしか書けていない、高校生や大学生の目線では書けていないと反省しています。

「モヤモヤ」の1番目は、高校教員がどれだけの時間と労力を探究にかけられるのか、かけるべきなのかということです。総合的な探究の時間に労力をかけることで教科指導・学習がおろそかにならないか、探究学習の意義は分かっても、自分自身が探究学習の経験がなく、また研究の経験もそれほどない中でどうすればいいのか。外部からの連携・協働・支援を受けるにしても、今度はコーディネートに膨大な時間と労力がかかる、それをどうすればいいのかということです。

もう一つのモヤモヤは、大学教員は探究実践においてどのような役割が果たせるのかということです。大学教員は本格的な学問・科学研究を遂行するような探究の支援に関わるケースが多いと思いますが、それ以外にどのような関わり方があるのかです。今日、ここに来られている先生は、もっと違う関わり方をされているのではないかと思います。もう一つ、これは自分のモヤモヤですが、これをやっていると高大接続のセグメント化に拍車をかけることにならないのかというのがモヤモヤしているところです。また後で議論させてください。

(スライド50) 私の講演は以上です。ご清聴いただき、ありがとうございました。

スライド 1

2025年度 第23回 高大連携教育フォーラム  
 探究的な学びが高大にもたらすもの—高大連携の「モヤモヤ」に迫る—

2025.12.6@キャンパスプラザ京都

**高大接続の「セグメント化」と探究学習の意味**

松下 佳代  
 京都大学大学院教育学研究科  
 matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

スライド 2

**自己紹介**

- **専門分野**
  - 教育方法学(能力、学習、評価が主テーマ)
  - 大学や中学校・高校をフィールドに研究と実践支援を行っています
- **実践・研究のフィールド**
  - 京都大学、新潟大学歯学部、藍野大学、岡山大学医学部、東京都市大学、京都芸術大学
  - 高槻中学校・高等学校、初芝富田林中学校高等学校、関西学院高等部、福島県立安積高等学校 など
- **社会的活動**
  - 日本カリキュラム学会代表理事、大学教育学会会長
  - 中央教育審議会大学分科会臨時委員
  - 日本学術会議連携会員 など



スライド 3

**本日のトピック**

従来、高大接続の議論では、2つの教育段階が異質であることを前提に、両者をいかにつなぐかが課題とされていた。

だが現在では、「高校の大学化」「大学の高校化」が進み、両者の異質性よりむしろ、各セグメント間の違いの方が拡大しているように見える。

この状況において、探究学習はどのような意味をもつのだろうか。

本講演では、いくつかの事例を挙げながら、セグメント化が進む高大接続の状況とそこでの探究学習の意味について論じたい。

スライド 4

**OUTLINE**

- 高大接続をめぐる状況
- 高大接続の「セグメント化」
- 高大接続における「モヤモヤ」
- 高校での探究学習の広がりや深まり
- 探究学習における「モヤモヤ」
- 【参考】探究でどう高大接続するか  
—対話型論証を通して—

スライド 5

**高大接続をめぐる状況**

スライド 6

**高大接続と高大連携**

- **高大連携**
  - 高校と大学の連携による、高校教育及び大学教育の改善充実に資する取り組み
- **高大接続**
  - 高校と大学を区切ること(非連続性)とつなぐこと(連続性)の両面をもちつつ、学習者の移行(トランジション)を促すこと
  - \*接続(articulation)・・・連続性と非連続性 cf. 関節



○ 櫻野裕彦(2009)『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望—』学事出版。  
 ○ 日本学術会議 心理学・教育学会 高大接続を考える分科会(2023)『日本における高大接続の課題—「セグメント化」している現状を踏まえて—』(https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-h230926-6.pdf)

スライド 7

### なぜ高大接続が問題化してきたのか

- 学校システムの構造変化:ピラミッド型から台形型へ
  - ← 大学のユニバーサル化

高校と大学は異質

高校の学校化 学生の生徒化

1960年

2022年

□ 荒井克弘 (2005)「入試選抜から教育接続へ」荒井克弘・楳本昭彦編著『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版部, pp. 9-16. 7

スライド 8

- 大学のユニバーサル化
  - 日本は2000年代半ば頃から

	エリート型	マス型	ユニバーサル型
大学在学率	~15%	15~50%	50%~
高等教育機会	少数者の特権	相対的多数者の権利	万人の義務
高等教育機関の特色	同質性 (共通の高い基準)	多様性 (多様なレベル)	極度の多様性 (共通の水準の喪失)
主要な教育方法・手段	個人指導、ゼミナール制	多人数講義 + 補助的ゼミ	通信・TV・コンピュータ・教育機器等の活用 (トロウ, 1976)

□ トロウ, H. (1976)『高度階級の大学—エリートからマスへ—』(天野郁夫・喜多村和之編訳) 東京大学出版会. 8

スライド 9

### 高大接続に関する政策動向

- 1990年代後半～:教育内容・方法を含めた接続を志向
  - 1999 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」
  - その後の答申も
- 2014年～: 三位一体改革から、次第に入学選抜の議論に焦点化
  - 2014 中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」(=高大接続答申)
  - 2015 高大接続システム改革会議
    - 2016 「高大接続システム改革会議「最終報告」」
  - 2019:大学入試のあり方に関する検討会議
    - 2021 「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」
    - …各大学が主体的に入学選抜を実施する

9

スライド 10

### 教育接続という課題

あらためて「教育接続」について考えるべき時期

- 教育接続とは
  - = (入学選抜だけでなく) 教育内容・方法や学力・能力等も含んで、高校と大学を接続させようとする考え方(荒井, 2005)
  - ユニバーサル段階での高大接続のあり方
- 「点」の接続(入学選抜)から、「面」の接続(教育接続)へ

1960年

2022年

10

スライド 11

### 高大接続の「セグメント化」

スライド 12

### 教育接続についての取組

- 教育接続についての取組
  - ①高校から大学への「移行期」に焦点化した、大学生向けの教育プログラム
    - 大学1年生に対する初年次教育
    - リメディアル教育(入学後の補習授業) ←大学に必要な科目・内容の未履修
    - 入学決定者に対する入学前教育など
  - ②大学の学びの先取的性格をもつ、高校生向けの教育プログラム
    - SSH(2002年度～)
    - SGH(2014～21年度)→SGHN(～26年度)
    - IBDP(国際バカロレア ディプロマ・プログラム)
    - 高校生向けの学問体験プログラム(例: 京都大学ELCAS)

12

スライド 13

### 「セグメント化」という現状

- 高大接続の「セグメント化」  
=教育内容・選抜方法・学習者の社会的属性などによって高校から大学への学習者の移行パターンが細かく断片化し、多様な高大接続が並存するようになった状況

【特徴】

- さまざまな格差の拡大(社会階層間、地域間、ジェンダー間)とも連動
- 「円滑な移行」を求める
- 「前倒し」、「困り込み」の傾向

スライド 14

【ユニバーサル化以前】

高校 → 入学者選抜 → 大学

【ユニバーサル化+18歳人口減少以降】

高校の大学化 → 高校 → 入学者選抜 → 大学の高校化

- ・2つの異なる教育段階の存在  
・両者をいかにつなぐかが課題
- ・<高校教育-入学者選抜-大学教育>というルートのセグメント化  
・セグメント間の違いが拡大

スライド 15

### 大学の高校化(学校化)と高校の大学化

- 高大接続のセグメント化の中で
  - 大学の高校化と高校の大学化が同時進行
  - 大学の高校化: 学業水準の引き下げ + 学業面・生活面でのケア・サービス
  - 高校の大学化: 探究活動の高度化(SSH, SGH等)

【背景】

- 18歳人口の減少による入学者獲得競争
- 高大接続改革

【例】奈良女子大学附属中等教育学校「高大接続カリキュラム開発プログラム」

高校  
・2・3年生対象「高大接続コース」  
・大学教員と高校教員が協働でカリキュラム開発

「高大接続入試」

大学

スライド 16

### 入学者選抜の分化: エリート選抜とマス選抜

- 「エリート選抜」と「マス選抜」(中村, 2011)
  - ユニバーサル化が進むなかで、大学入学者選抜が2タイプに分化
  - エリート選抜  
= 高等教育のエリート段階において支配的で、かつエリートを念頭に置いた選抜  
\* ユニバーサル段階でも残存
  - マス選抜  
= 高等教育の大衆化を含む教育拡大の圧力によって生み出され、かつ必ずしもエリートとはいえない学生を念頭に置いた選抜

選抜性	選抜方法
エリート選抜 高	一般選抜(科目数多い)、学力型AO入試(総合型・学校推薦型選抜)
マス選抜 低	一般選抜(科目数少ない)、学校推薦型選抜、総合型選抜

2024年度

スライド 17

### 高大接続の社会階層間格差

- 高校卒業後の進路希望(母親学歴別)
- 高校卒業後の進路希望(世帯収入別)

○ 調査: 高橋(研究代表)(2021)「高校生の高等教育進学動向に関する調査研究 第一次報告書 令和2~4年度プロジェクト研究報告書」国立教育政策研究所

スライド 18

### 高大接続の地域間・ジェンダー間格差

男女別・都道府県別の4年制大学進学率

大学進学率を男女別により、都道府県別(40都道府県)で男性の方が女性より高く、男女の進学率の差は①山梨県(15.6ポイント)、②滋賀県(10.8ポイント)、③北海道(9.8ポイント)の順に高い。

性別: 男性性, 女性性

①山梨県 ②滋賀県 ③北海道



スライド 25

● 事例校	学校名	地方	国公私	学科
	北海道公立高等学校	北海道	普通	
	宮城県仙台国際洋高等学校	東北	専門	
	宮城県仙台第三高等学校	東北	普通・専門	
	東京独立八王子東高等学校	関東	普通	
	福井県立石浜高等学校		普通・専門	
	山梨県立新牧高等学校	中部	普通・専門・総合	
	長野県飯城高等学校		普通	
	滋賀県立彦根高等学校		普通	
	京都府立藤川高等学校		普通・専門	
	京都府立豊岡工業高等学校		専門	
	立命館宇治中学校・高等学校		私立 普通	
	京都産業大学附属中学校・高等学校		私立 普通	
	大阪府立三国丘高等学校	近畿	公立 専門	
	高槻中学校・高槻高等学校		公立 普通	
	香取マウェール学院中学校・高等学校		私立 普通	
	兵庫県立箕田高等学校		公立 専門	
	兵庫県立養父高等学校		公立 専門	
	神戸大学附属中等教育学校		国立 学科の区別なし	
	岡山県立岡山南高等学校		公立 専門	
	広島県立広島中学校・広島高等学校	中国・四国	公立 普通	
	広島県立広島南高等学校		公立 普通	
	広島県立西条高等学校		公立 専門	
	長崎県立和魂高等学校	九州	公立 普通・専門	

スライド 26

● それぞれの特徴

- ① 教育で未来を創る高、進捗の挑戦  
【北海道公立高等学校】
- ② 地域産業を地盤とし、海と生きる専門学科の課題解決学習  
【宮城県仙台国際洋高等学校】
- ③ 学校外の世界に乗り出す探究がカリキュラムを駆動する  
【東京独立八王子東高等学校】
- ④ リベラルアーツ文化の薫る公立校の新たな挑戦  
【京都産業大学附属中学校・高等学校】
- ⑤ 生徒の主体性を育む探究カリキュラムと教員の協働的関わり  
【福井県立石浜高等学校】
- ⑥ 生徒と教員が探究できる学校を目指して  
【山梨県立新牧高等学校】
- ⑦ 地域社会と生徒たちを結びつける「飯城学」  
【長野県飯城高等学校】
- ⑧ 当事者としての深化と閉鎖を目指す探究  
【滋賀県立彦根高等学校】
- ⑨ 充溢探究力のさらなる高みを目指すカリキュラム再編  
【京都府立藤川高等学校】
- ⑩ 美術を選んだ領域横断的な探究のあり方  
【京都府立豊岡工業高等学校】
- ⑪ 自己の生き方・在り方と向き合う探究学習  
【立命館宇治中学校・高等学校】
- ⑫ 「情報」との連携・独自の評価システムによる探究  
【京都産業大学附属中学校・高等学校】
- ⑬ 豊かな探究力と豊かな倫理力の育成を目指す探究学習  
【大阪府立三国丘高等学校】
- ⑭ GLコースでの対話型論議を軸としたカリキュラムの構築  
【高槻中学校・高槻高等学校】
- ⑮ 社会で活躍できる人材を目指すPBL  
【香取マウェール学院中学校・高等学校】
- ⑯ 分野・言葉の壁を越え、世界を視野に入れた探究活動  
【兵庫県立箕田高等学校】

スライド 27

各学校が、それぞれのニーズやリソースを踏まえて創意工夫をこらしながら、一口から探究のカリキュラムを創造

● 探究のスタイル

- 本格的な学問・科学研究を遂行する探究
- 地域と連携したり、地域の課題解決に参画したりする探究
- 社会問題の解決や究明に取り組む探究
- 企業との共同開発を行う探究
- 自身が関心を持つテーマをほとんど調べしていく探究
- 自分の生き方に向き合う探究
- 専門学科の強みを活かして行う探究
- 特定の理論に根ざして展開する探究 など

- ① 専門性を生かした地域課題解決のための「総合学習」と「課題研究」  
【兵庫県立農業高等学校】
- ② 異学年協同授業で深める探究学習「Kobeプロジェクト」  
【神戸大学附属中等教育学校】
- ③ 探究的学びのスタイルを育成するカリキュラム  
【岡山県立岡山南高等学校】
- ④ 6年間を貫いた探究学習「たけなほ」から「課題研究」へ  
【広島県立広島中学校・広島高等学校】
- ⑤ 生徒の主体性を尊重した「課題解決型」と「ナゾ解明型」  
【広島県立広島南高等学校】
- ⑥ 専門科目と普通科目の連携・融合・往還を基盤とした探究カリキュラム  
【広島県立西条高等学校】
- ⑦ 地域と共に学ぶ「まふた」探究学習モデル  
【長崎県立和魂高等学校】

スライド 28

探究のカリキュラムにおける3つの志向

● 探究のスタイルの違いを生み出すもの

↓

● 3つの志向のどれに重点を置こうか

- 学問(専門研究志向)
- 社会(社会参画志向)
- 自己(生き方探究志向)

…どこかの志向に軸足がありつつも、すべての志向が有意義に組み込まれている

【例】鹿追高校、若狭高校、松浦高校  
● 地域課題に参画しながら、自己の生き方と向き合い人間的成長を遂げることをめざす

□ 資料対表・石田智哉(2025)「深まりのある探究へと生徒をどう導くか」松下他編『高等学校 探究の学び実践事例集一次の一手へ通じるへ』学事出版

スライド 29

探究実践のポイント

● ① 総合と教科の関係は？

- 教科→総合：教科の学びを総合探究の土台にする(例：八王子東、専門高校)
- \*教科で深い学びにつながる良い問いを体験することで、総合での自分の問いの立て方を学ぶ
- 総合→教科：総合探究での学びが教科の授業や学びの様式が変容(例：仙台三高)
- 教科と総合の共通部分：情報(例：京産大附属中高)、対話型論議(例：高槻中高)

● ② テーマと問いをどのように立ち上げるか？

- 学問的関心、社会的関心、個人的関心のどこに軸足、出発点があっても、他の2つも組み込んでいく
  - 不確実で疑問を感じる状況、困惑や混乱から探究は始まる(デュイ)、怒りから(本田由紀)
  - 例：電車の中で見た「スマホ育児」
  - 「プロットシート」と「質問シヤワー」(例：八王子東)

スライド 30

プロットシート

質問シヤワー

● 「外来魚は環境にどのような影響を与えるのか」

- 「外来魚とは何か」
- 「環境とは、具体的に何を指すのか」
- 「対象とする地域や年代・時期はどこか」
- 「浅川の中流域におけるスモールマウスバスの用水路への移動は在来種であるタナゴの繁殖にどのような影響を与えているのか」

図2. プロットシートと生徒の記入例(『探究ハンドブック』より) (松下他編, 2025, pp. 63-64: 岡村亮祐執筆)

スライド 31

③ 探究のノウハウをどのように教え、どのように学ぶか？

- 1. 探究の型を学ぶ(例:高槻中高「対話型論証」) →【参考】
- 2. ミニ探究を試行して、探究の作法を経験的に学ぶ
- 3. 先輩から学ぶ(例:神戸大附属中高)
- 4. とりあえず飛び込んでみる

④ 探究実践において教師はどのような役割を果たすか？

- コーチ、メンター、伴走者の役割
- 先行・先輩探究者の役割
- 探究の環境整備者、学校外とのつながりを作るハブ的存在の役割

31

スライド 32

⑤ 探究的な学びの過程と成果をどのように可視化するか？

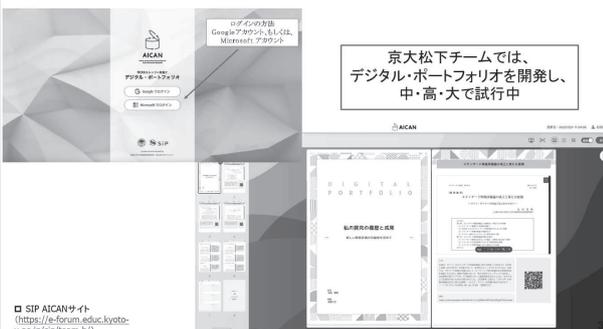
- ポートフォリオ評価…学びの履歴(ストーリー)と成果(エビデンス)を可視化できる
- 「キャリア・ポートフォリオ」(例:京都市立美術工芸高)
  - 四者面談(生徒、担任教師1名、美術工芸教科教員1名、保護者):その学期の学びを振り返る機会



図3. カスタマイズされた表紙例 図4. 記録の方法 写真3. 四者面談の様子

(松下他編, 2025, p. 114: 小柳至幸執筆) 32

スライド 33



京大松下チームでは、デジタル・ポートフォリオを開発し、中・高・大で試行中

SIP AICANサイト  
(<https://se-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/sip/team-b/>)

スライド 34



34

スライド 35

⑥ 探究指導のカリキュラム・マネジメントをどう行うか？

- リーダーシップ発揮型**
  - リーダー: 校長(例: 笛吹高)、ミドルリーダーの教師(例: 立命館宇治)
- 教員組織連携体制構築型**
  - 推進チームを構築(多数) / 全教員が関わる仕掛け(例: 仙台三高) / 特定の教員間で連携(例: 高槻中高)、普通教科と専門教科の連携(例: 京都市立美術工芸高)
- 文化醸成型**
  - 学校の伝統的文化、取組の中で醸成(例: 西条農業高)
- カリキュラム開発・改善の仕組み創出型**
  - 関係者での定期的なミーティング(例: 松清高)
- 外部連携・協働型**
  - 大学院生のTAIによる探究支援(例: 堀川高)
- 外部支援活用型**
  - 地域企業の協同組合が地域コーディネーター的役割(例: 坂城高)
  - 「プロボメンター」としての企業・専門家・町民の伴走(例: 鹿追高)

35

スライド 36



探究学習における「モヤモヤ」

スライド 37

- **モヤモヤ1: 高校教員はどれだけの時間と労力を探究にかけるべきか・かけられるのか?**
  - 総合探究に時間と労力をかけることで、教科指導・学習がおろそかにならないか?
  - 探究学習の意義がわかって、自分自身が探究学習の経験がなく、研究の経験もおぼつかない中で、どうすればよいのか?
  - 外部からの連携・協働・支援を受けるにしても、今度はそのコーディネートに膨大な時間と労力がかかるのをどうするか?
- **モヤモヤ2: 大学教員は探究実践においてどんな役割を果たせるのか?**
  - 「本格的な学問・科学研究を遂行する探究」の支援に教員・院生が関わるケースが多いが、それ以外にどんな関わり方があるのか?
  - 高大接続のセグメント化に拍車をかけることになるのか?

スライド 38

【参考】探究でどう高大接続するか  
—対話型論証を通して—

スライド 39

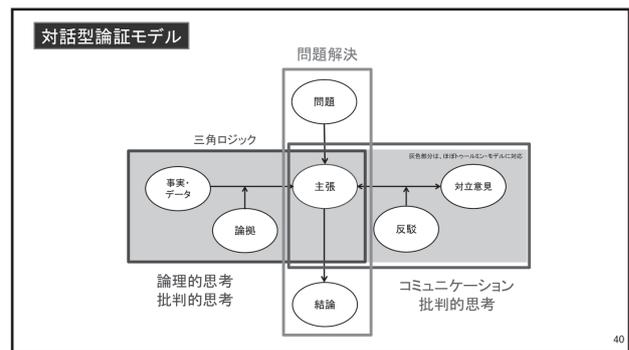
学校でぜひ身につけてほしいこと

- 予測困難な時代  
「学校で身につけてほしいこと」を一つに絞るとすれば…  
←小学校から大学までさまざまな授業や生徒・学生をみてきた経験から

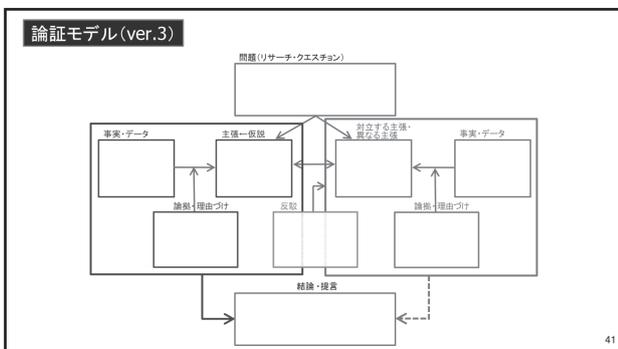
↓

「対話型論証」  
=「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」

スライド 40



スライド 41

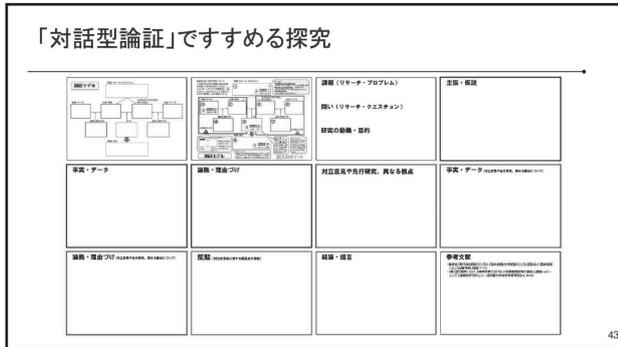


スライド 42

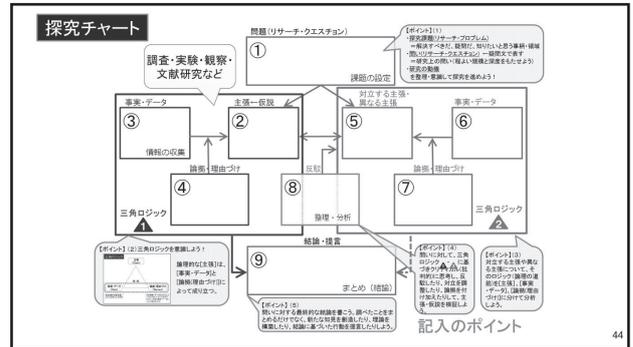
高槻高校 (GLコース)での取組

- **高校1年: キャリア探究**
  - 4月～9月: 教師が生徒に様々な問題を与え、生徒はその問題に対して結論を導く
    - 文理選択は必要か? / iPhoneロック解除をめぐる是非 など
  - 10月～2月: 自分や社会の未来に関連する事柄について論証モデル (ver.3)を使いながら、個人で文献探究
  - 2月: 探究の成果についてポスター発表
  - 3月: 探究レポートの提出
- **高校2年(文系のみ): SDGs探究**
  - 4月～7月: 教師が生徒にSDGsに関連する問題を与え、生徒がその問題に対して結論を導く
    - インタビューとアンケートの手法について学ぶ
    - ミスコン開催をめぐる新たな改革 / 大学入試における公平性 など
  - 8月～2月: SDGsに関連する事柄について論証モデル (ver.4)を使いながら、グループで調査探究
  - 2月: 探究の成果についてポスター発表
  - 3月: 探究レポートの提出

スライド 43



スライド 44



スライド 45



スライド 46



スライド 47



スライド 48

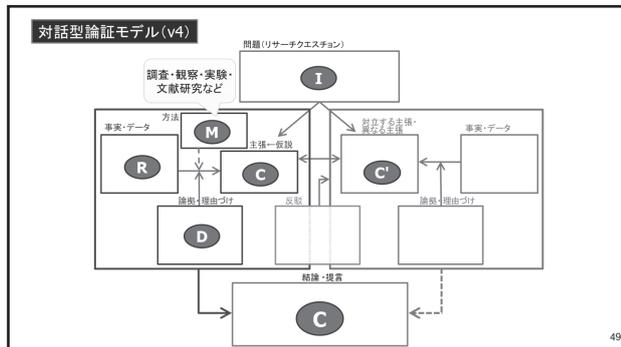
### 大学での研究とのつながり

- 研究 ≡ 探究 ≠ 調べ学習
- 研究と探究
  - 共通点: 構造は同じ(IMRAD)
    - Introduction: どんな問題?
    - Methods: どんな方法で?
    - Results: どんな結果になった?
    - Discussion: 何を意味する?
    - Conclusion: 結論は?
  - 相違点: 研究には新規性と学術的価値が必要

① 自ら問題を発見し、  
② 調査・観察・実験などによって事実を明らかにし、  
③ 事実に基づいて論理的・批判的な思考・判断を行い、  
④ 導いた結論を表現したり、問題を解決したりする学習活動

□ 梶見孝 (2017) 『探究力と創造性の獲得』高澤伸介 (編著)『探究！教育心理学的の世界』新曜社。

スライド 49



スライド 50

ご清聴ありがとうございました



松下 佳代  
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

50

## パネルディスカッション

- [ パネリスト ] 松下 佳代 (京都大学 大学院 教育学研究科 教授)
- [ パネリスト ] 倉部 史記 (追手門学院大学 客員教授)
- [ パネリスト ] 小谷 英里 (聖ヨゼフ学園 日星高等学校 探究主任)
- [ コーディネーター ] 杉岡 秀紀 (福知山公立大学 地域経営学部 准教授)



細尾： では、お時間になりましたので、これよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。まずは登壇者、コーディネーターの皆様をご紹介させていただきます。はじめに基調講演にご登壇していただきました、京都大学大学院教育学研究科教授の松下佳代先生です。追手門学院大学客員教授の倉部史記先生です。聖ヨゼフ学園、日星高等学校キャリア探究部探究主任・理科主任・ユネスコスクール担当、SDGsクラブ担当の小谷英里先生です。そしてコーディネーターは、大学コンソーシアム京都高大連携推進室コーディネーターで、福知山公立大学地域経営学部准教授の杉岡秀紀先生です。

続いて、パネルディスカッションからご登壇していただきます、倉部先生と小谷先生のご経歴を、私から簡単にご紹介させていただきます。倉部先生は慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程を修了後、私立大学職員、予備校研究所主任研究員を経て独立されま

した。現在は追手門学院大学客員教授、情報経営イノベーション専門職大学院客員教授を務めておられます。進路選びではなくて進路づくり、入試方法ではなく高大接続を重視し、全国各地の高校において進路指導担当教員向けの研究や高校生向けの講演を年間100回にわたり実施してこられました。こうした取り組みを通して、現場の課題に寄り添いながら具体的な提言と実践を続けております。また、三重県立看護大学高大接続事業外部評価委員、文部科学省、高大教育再生加速プログラム(入試改革・高大接続ペーパーレフェリー)など、各大学や文科省の事業において高大接続に関する評価委員を務めるなど、公的な場でも活躍してこられました。著書に『ミスマッチをなくす進路指導』があります。進路指導や高大接続分野において研究と実践の両面が幅広く取り組まれ、ご活躍されています。

小谷先生は京都府舞鶴市のご出身で、幼少期から学校の行き帰りに目にする山や田んぼ、海の色彩の移ろいに深い感銘を受け、自然と人間活動の共存を生涯のテーマとして志されました。大阪府立大学農学部にて都市計画、特にランドスケープデザインを専攻され、修士号を取得されました。その後、一般企業にてコンサルタントとして勤務され、自治体の計画策定や調査、ワークショップなどに携われるご経験を積まれました。同社をご退職後、府立高校を経て日星高校に着任され、現在は探究学習や理科

教育を中心に、生徒一人一人の学びを社会へとつなぐ教育実践に取り組んでおられます。日々の生徒との対応を通じ学習指導要領はマニュアルなのか、教科書の内容は何を目指しているのか、高校生の日々の努力は社会とつながっているのかといった疑問と向き合い、教育のあり方を日々摸索されております。

それでは、ここからの進行はコーディネーターの杉岡先生にお願いいたします。杉岡先生、よろしくお願いいたします。

杉岡： 皆さん、こんにちは。お腹いっぱいになって、ちょっと眠くなってくる時間かもしれませんが、よろしくお願いいたします。以降、着座にて失礼いたします。

さて、今、司会の細尾先生からご紹介がありました。新しくお二方のパネリストを迎えて、4名でパネルディスカッションを開催していきたいと思っております。冒頭、私の簡単な自己紹介と趣旨説明をさせていただきます。



まず、私の自己紹介です。今日の主催側の一人でありまして、2017年度からこの室員をしております。もうすぐ10年目を迎えます。大学の中でも高大連携を担当しております。そのほか、京都府教育委員会の仕事や、高校15校と中学校3校の探究の日に伴走をし、大学の授業の合間を縫って現場に入り込んでいます。今日、冒頭で松下先生が「探究において、大学の教員の役割

は何だろうか？」とおっしゃいました。私もその「モヤモヤ」を日々、悩みながら、どんな貢献ができるのかなと感じながら、今日コーディネーターという役割を務めてまいりたいと思います。

(スライド19、20)パネリストをご紹介いただきましたが、私なりに少しだけ追記しておきたいと思えます。(スライド21)倉部先生とは、2~3年前に朝日新聞が主催している中退予防ネットワークにおいて、初めてお会いしました。当時は「高大共創コーディネーター」という肩書きでしたが、様々なセッションで一緒させていただきました。高校にも明るく、大学にも明るくということで、本日は高校・大学の両方を熟知するお一人として登壇をお願いしました。

(スライド22)続いて、小谷先生です。プレゼン資料にも出てくるかもしれませんが、私も日星高校の探究の伴走に入らせていただいております。普通科改革の中で、まさしく探究を中心に据えた学校づくりを進めておられます。探究の責任者という形の中で、小谷先生が奮闘されている様子をお聞きし、ぜひともこの場でお話していただきたいとお願い申し上げた結果、本日の登壇に至りました。

(スライド23)松下先生とは本日で二度目となりますが、ふとしたところでご縁がありました。関西学院大学が行っている、神戸市の王子公園の再整備に関わる大学設置運営事業があり、その設置を巡る審査をご一緒させていただいたご縁から松下先生と知己を得ました。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

(スライド24)では、まずは本日のテーマを紹介したいと思います。本日は「探究的な学び」という非常に大きいテーマになります。本日、松下先生は「探究学習」という言葉が使われましたが、ここでは「探究的な学びが高大にもたらずもの」と表現します。「もたらず」と言うからには、ポジティブな面とネガティブな面の両方があります。本日のキーワードについては、午前中は

セグメント化とありましたが、もちろん、その功罪があると思います。良い点については比較的伝わりやすく、先ほどのご質問の中にもありましたが、成功事例やグッドプラクティスは比較的伝わりやすいと思います。一方で、言語化されていなかったり、文章化されていなかったりする部分の「モヤモヤ」は、私も現場で感じておりますし、本日、皆様にご参加されているということは、何かしら「モヤモヤ」を抱えてこの場にご参集されているのではないかと思います。本日はどちらかという、その「モヤモヤ」の部分に着目しながらディスカッションを進めていきたいと思っております。

(スライド25、26) その背景です。本日、松下先生から、素敵なお著書(「探究的な学び 実践事例集 次の一歩への道しるべ」)のご紹介がありました。私もつい先日購入し、読ませていただきました。今、写真で映しておりますのは長谷川委員長の先ほどのスライドです。内容については読み上げませんが、長谷川先生からも「モヤモヤ」をいっぱい書いていただいております。(スライド27)そして、この書籍の冒頭に、本日のもう一つのキーワードである、「高校の大学化」という話が出ておりました。高校が大学に近付いてきている現象について、良し悪しがあると思います。午前中に、高校だけで完結する、全て探究で終わるべきではないかというディスカッションもありました。こうした点も含めて、この書籍の中で関連したことがご紹介されています。多分、この議論を応用していけば、小学校の中学校化、中学校の高校化といった話も出てくるかと思いますが、本日は高大に絞りたいと思います。

(スライド28) それから、本日午前中にもご紹介がありましたが、私も現在、18校で伴走させていただいており、学校によって型が分かっているなど日々実感しております。まさしく大学で行われている学びを少しずつ高校生にも取り組めるような、いわゆる専門研究を進めていくよ

うな探究もあります。一方、日星高校の話は、どちらかという中間に近いのではないかと思います。地域とつながりながら社会参画型の探究もあれば、キャリア探究も含めて自己(生き方)の探究もあります。それぞれ正解はないですし、ミックスしている高校もあるかと思えます。

(スライド29) こちらの書籍にも入っておりますが、その方法についても、すでに教科書が幾つか出ております。そのような教材を用いて教える方法もあれば、ミニ探究等を繰り返して、経験の中から続けて進化させていったり、あるいは先輩の背中を見て、3年生が2年生、2年生が1年生という形で中間発表会や成果発表会の中で伝えていったりという学びもあります。あるいは、生徒自身が独自で頑張っていく方法もあるかもしれません。(スライド30) 松下先生からは、教師の役割についても言及がありました。非専門家として、方法論の伴走だけをしていく場合もあれば、そのテーマに従事して、高校時代から「何とかゼミ」と称して、理科、社会、数学、それぞれの先生の強みを生かした伴走をしていく探究もあります。コーディネーターが地域に介在していきながらバトンをかけていく、このような教師の役割があることが、この書籍の冒頭で言及されています。

何を申し上げたいのかということ、探究の進め方に正解はないということです。そうした中で、どのように組み合わせていけばいいのか、もしかすると段階論があるかもしれませんし、組み合わせの妙みみたいなものがあるかもしれません。そうした中で、これは「モヤモヤ」なんですよ。学年によってカラーも違う、校長との相性、あるいは探究部長や教務主任との相性など様々な要素が変数となるため、一筋縄ではいきません。現場ではそのような状況がありますが、本日、答えを出すことはなかなか難しいので、皆さんの「モヤモヤ」を少しでも見える化できればと思っております。悩んでいるのは自分だけではないということを見える化する中で、相談でき

る仲間といますか、ちょっとした光が見えてきたらいいかなと思っております。この1時間で答えが出るとは全く思っておりませんので、その点だけご容赦を頂ければと思います。

(スライド32) 進行について、1点だけ皆様にお願ひがあります。本日は、参加型で進めたいと思っております。皆様のお手元に配布している資料の中に、QRコードを読み取る用紙があったと思います。今、ここで読み取っていただいてもかまいません。今から倉部先生、そして小谷先生にレクチャーをしていただきます。また、前半の松下先生のお話に対して質問したかった方もいらっしゃるかもしれません。そちらも含め、ぜひご質問をお寄せください。1点だけお詫びです。おそらく、全ての質問にはお答えできませんので、今日は、ぜひこれは拾ってみたいと思うものを中心に、後半は皆さまからの質疑を中心に進行していきたいと思っております。お話を聞きながら、先生方、職員の方、企業の方、大学関係者など、様々な立場の方がおられますので、それぞれの観点から質問を投げかけていただきたいと思います。常にこれを見ながら進行してまいりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、パネリストのお二人に改めてご登壇していただきます。まずは自己紹介、活動紹介から始めてみたいと思います。倉部先生から、自己紹介と活動紹介をお願いできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



(スライド1)

倉部: はい、ありがとうございます。改めまして、皆さん、こんにちは、倉部史記と申します。よろしく申し上げます。自己紹介、兼、問題提起をさせていただきます。ご紹介を頂いたように、私はもともと大学の職員です。今日は、多分、職員の方もいらっしゃるよね。その後、予備校に転職をして、現在はフリーランスのような、独立した立場で仕事をしています。そのため、意図していたわけではありませんが、結果的に高校生や大学生、就職活動中の学生の相手をしていました。先ほど、高校・大学両方を熟知しているとご紹介いただきましたが、それは少し言い過ぎで、実際には両方に挟まれながら、一緒に「モヤモヤ」している感じです。

(スライド2) 今、高大接続に関するお仕事を中心にしています。

(スライド3) 普段は進路やキャリア系の仕事が多く、各都道府県に進路指導協議会がありますが、そういったところで進路指導の先生方と一緒にあるべき高大接続のあり方を考えています。

ちなみに、1年間で大体100校程度の高校を訪問しており、先ほど、「セグメント化」という言葉がありましたが、かなり多くのセグメントに向き合ってきたのではないかと思います。

(スライド4、5) 京都だけでも、1年間で十何校ほど訪問しています。最後の1ページだけ見ても、一番上の諫早高校はノーベル化学賞の下村博士の母校です。また、熊本済々黌高校など県を代表する学校もあります。一方で、離島の高校もあります。この離島の高校と、東京都や京都の私立の中高一貫校で同じ探究ができていないわけがないです。どこの大学が支援してくれるのか、ということと向き合うわけです。そうすると、私自身も様々なことを考えさせられます。最近、県立や市立の通信制高校に呼ばれる機会も増えました。あらゆる高校から大学

に進学する、まさにユニバーサル化の現場にあります。

(スライド6) 私が以前NPOの理事だった頃、このような白書を作りました。今日、この後の議論の参考にもなると思います。(スライド7) 「進路指導の責任者、進路指導主事として先生は何年くらい経験されていますか?」と主事に聞いたところ、経験年数が3年以内が58%、5年以下が79%という結果でした。私たちがさまざまな雑誌やメディアで見かける素晴らしい進路指導の事例の多くは、多分、数少ない経験豊富なベテランの方々が生み出しているものも多いのではないのでしょうか。多くの進路指導の先生方は、突然進路主事を担当してほしいと指示され、何をやるか分からず、とりあえず業者を呼ぶといったこともあるわけです。

(スライド8) 「進路指導部として、大学の情報を検討する際、何を重視していますか。」一番上に入試の話が来るのは致し方ないと思いますが、大学改革で大学が一生懸命、力を入れている部分がことごとく見られていない、中退率なんか見てない「アドミッション・ポリシーって、なんですか?」という状態だったりします。

(スライド9) 「先生はどのようなことを重視して進路指導されていますか」というと、一番多かったのは本人の興味・関心に合ったマッチング。次いで主体的に自分の進路を考える、です。「難関大学に進学させる」、「保護者の意向」などについては、そこまで重視されていないという結果になります。

(スライド10) ここで聞き方を変えて「先生の指導はどの部分で評価されますか?」と聞くと、皆さんの予想どおりの結果になります。最多は「国公立への合格実績」です。先生方も、必ずしも自分が望むような指導はできていないわけです。

(スライド11) こちらは自由記述で、現在、抱えているお悩みを聞いた結果ですが、全部同じようなことが書いてあります。例えば3つ目。

「生徒へのアドバイスが一貫せず、無責任な言動をする教員が野放しになっていて、進路指導としての役割が骨抜きにされている」。魂の叫びですね。要は、主事の先生がどんな思いを持っていても、学年として、高校全体として一緒になっていないのです。だから、結局、学校や学年によってむらも出るし、進路指導の方針が全く異なってしまうのです。

(スライド12) 私が講演に呼ばれる際、間に業者が入っている場合などでは、講演についてのご要望をいただくこともあります。「地方の国公立大学について、とにかく語ってください」「後期試験を受けるために、最後まで粘ることが大事、という結論をお願いします」などなど。なるほど、と思いました。手段と目的が逆転しているのでは、と感じるケースもあります。最後まで勉強させるために国公立を目指させるのでは?と。(スライド13)「本校は、ほぼ全員に国公立を受けさせますので、私大と推薦の話はしないでください。」私は一応、追手門学院大学客員教授という肩書きなんですが……と、少し切ない気持ちになりますが、なぜこのようなことになるのか、その事情も分かるのです。先生だけが悪いわけではない、これ(国公立大への合格実績)で地域の中学から評価されてしまう、という事情が背景にありますよね。探究でも同じことが起きてはいないのでしょうか。特定の先生だけに負担が集中したり、ノウハウが偏ってしまったり、それが引き継がれなかったり。あるいは「結局、入試に使えるのか?」というところで、探究で何をすべきかが決まってしまう。進路指導と同じ課題が生じているのではないかと、いうところを問題提起にして、自己紹介を終えたいと思います。以上です。

杉岡: はい、ありがとうございます。さすが倉部先生、講演慣れをしていらっしゃるの、高大連携漫談家みたいな感じでしたね。ありがとうございます。

倉部： 芸人みたいです。

杉岡： 芸人のほうがいい言葉かもしれませんね。ありがとうございます。

では、小谷先生、今度は高校の立場からお願いいたします。先ほどのご紹介をお聞きしていると、ただの高校の教員だけではなくて、コンサルタントのご経験や府立高校での勤務もあるとのことで、府立、私立、幅広く見てこられたのではないかと思いますので、それも含めて自己紹介をよろしくお願ひいたします。



小谷：(スライド1～3) 改めまして、日星高校で探究主任をしております、小谷英里と申します。よろしくお願ひいたします。

前に書いてあるような役職を持っていますが、日本海側の地域の舞鶴で生まれまして、そこで育って、また戻ってきたという、田舎で生まれて、田舎で育ったという人間です。鳥居があるほうは、今年、1年生が校外学習をするときの下見に行った場所の景色を写しています。晴れた日で、とても気持ち良くて「いい景色だな」と思って撮った写真です。日星高校は、このようなところに立地しています。下にある写真が、ラベンダーで作ったブーケになります。近くのホテルでブーケを作るワークショップをやっていました、子どもと一緒に行って作ってきました。ラベンダーも自然のもので、そういったものを作って遊ぶのが好きな人間です。ラベンダーの後ろには、はっきり映っていませんが、天橋立が映って

います。こんな雰囲気です。

私は大学を修了した後、最初は一般企業でコンサルタントに就いていましたが、あまりにも激務だったため、いったん人生を考えようと思い、教員に転向した経緯があります。学校に入ってみて思ったのは、社会を1回、見ているという視点は、ほかの方にはない経験なので、学習をどちらに持っていこうという話をしたときに、学校にずっとおられた先生とは違うのかなというのはたまに感じる時があります。

(スライド4～8) 日星高校で行っている活動ですが、本校は聖ヨゼフ学園ということで、カトリックの学校です。生徒数は大体300名います。立地は舞鶴市になりますが、今、映しましたように、非常に自然の恵みが豊かです。これは舞鶴市のホームページから取ってきたものですが、田辺城があります。右上の白黒の写真は引揚の栈橋を撮った写真になりますが、戦争のときの歴史があったり、あとは豊かな自然があったり、非常にいろいろなものに恵まれている地域です。これを舞台にして、生徒たちが探究学習をたくさん経験して、身に付けてくれたらと思っています。

(スライド9～10) 教育理念は、こんな感じですか。グラデュエーション・ポリシーも、こんな感じで4つ設定しています。(スライド11～13)

DXハイスクールと、それから普通科改革支援事業の採択校になっています。来年度からは、新学科の地域未来科を開設予定になっています。今年度からは、2年生の選択科目として地域未来学をスタートしています。地域未来学というのは地域に根差したPBLと、それからリサーチ型で探究を行っていきましょうということを行っています。最初は2年生で、このような感じで実施しています。教員と外部支援者、それからコーディネーターにも入ってもらって、伴走しながら生徒が自分の好きなことを地域の中で見つけて、それをプロジェクトにしていって進めています。(スライド14～15) 本校

の探究学習の流れは、どちらかというと行動から行こうということで、OODAループを基準にした考え方でやっています。本年度の探究テーマは、こんな感じです。生徒たちが、それぞれグループでどんなテーマがいいかを考えて、いろいろ出してくれています。

ここからは冊子をお配りしておりませんが、地元の企業の三葉商事さんとコラボして帽子を作ったりしました。それから、ビンゴ大会を企画したりしましたが、大失敗したので、もう1回、頑張ろうとしています。

それから、おじいちゃん・おばあちゃんのリフレッシュの場を作りたい、高齢者施設でイベントをしたりしました。あとは、ITOというカードゲームがあり、それを舞鶴版にアレンジしたのになります。それから、図書館を活性化したりしています。それから、フードロスを減らすために、万願寺甘とうという地元の野菜を使ったスイーツの開発をしたりしました。あとは、歌が大好きな子がいて、合唱をすることで地域の人とつながろうというプロジェクトをしています。そこで龍大クエスト、龍谷大学の学生の皆さんにもオンラインで伴走していただいたり、実際に来ていただくことを進めています。あとはAIも導入して、AIと受け答えしながら自分の考えを深めることも進めています。

今年、地元の商店で実際に万願寺とうがらしのクッキーが販売されました。税込270円で売られています。あとは、アートプロジェクトもしたりして、これで大学に進んだりもしています。

(スライド16、17) 中央教育審議会が論点の中で「好きを育み得意を伸ばす、当事者意識を持って、自分の意見を形成し」と述べていますが、まさにこれをやろうとしている感じの学校です。(スライド18) 学び合い、育ち合いの循環で、それが未来を作っていくと思っています。好きということはやっていけたので、生徒たちも少し動くようにはなってきましたが(スライド19)、課題はまだまだあって、もっともっと社

会貢献したり、実際に解決につなげていこうとか、生徒自身の考えを深めていきたいとか、様々な課題があると思っています。ありがとうございます。

杉岡: 小谷先生、どうもありがとうございます。大変短い中に、いろいろなエッセンスが詰まっていたと思います。

(スライド44) ここからは少しずつパネリスト同士の議論、そして参加の皆様とのディスカッションに移ってまいりたいと思っています。まずは探究の「モヤモヤ」について、少しお話してみたいと思います。「今日は、モヤモヤの話を中心に」と言いましたが、私が最近関わっていて、これはいいなと思った、グッドプラクティスを少しだけ話したいと思います。

まずは、こちらです。(スライド45) 以前、フォーラムにもご登壇いただいたこともある、宮津天橋高校です。学年の中間発表会や成果発表会をされる際によくあるのは、ポスターやスライドを使った発表で、全体像が見えなかったりします。限られた時間の中では、われわれが見ることができる発表は片手から両手程度の本数になります。でも、全体では数10本発表しています。それを見える化するために「ショートピッチ」というものを行っておられます。一人30秒程度で、自分の探究のエッセンスを話し、全体を聞いた後にそれぞれ聞きたいところを選んで聞きに行くという方法で進めています。この方法がとても秀逸でしたので、勤務先のオープンキャンパスで実施してみました。高校から学び、大学で応用させていただきました。全体を見られる人がなかなか少ない中で、これは本当にいい取り組みだと思っています。今日、ご参加の皆様にもこの事例を知っていただきたいと思って、紹介させていただきました。

(スライド46) 次に同じ高校になりますが、これは部活としての探究になります。今日はあまり深掘りできませんが、2022年度以降、今の

学習指導要領が始まって、今の大学1年生たちが高校で必修の子どもたちになります。しかし、やはり、カリキュラムには限界があって、全体を必修にしたらどうしても全体が薄まった感というものを、私も現場で伴走していて感じています。そうした中で言うと、本当にやりたくて、目がきらきらした生徒たちをどのように応援していくのか、その受け皿として自然科学部などの部活で探究をしていくという切り口が、これからより重要ではないかという事例になります。

(スライド47) 最後に、これは中学校です。これは兵庫県のある中学校ですが、探究は概してチームごとに縦割りで分かれますよね。そうなってくると、チーム同士の横のつながりがないわけです。縦割り化して、たこつぼ化していきます。それが全て悪いと言っているわけではありません。しかし、横のつながりを意識する瞬間の取り組みとして、この中学校では探究で出てきた課題を最後にドラマ仕立てにして学園祭で演劇をしています。そうした中で、みんなと一緒に地帯の問題や社会のテーマを見える化し、それを他者に伝える、親御さんにも伝える、教師にも伝える、後輩たちにも伝えて、自他ともに腹落ちするような仕掛けを作っていました。これは中学生の取り組みですが、高校でも十分応用できるのではないかと考えています。こうした取り組みも「モヤモヤ」の後に出てきた1つの回答だと思っています。

(スライド48) さて、そうした中で、今日のテーマを「探究のモヤモヤ」としたわけですが、ChatGPTに「探究のモヤモヤについてどう思う？どんなものがあるかな」と聞いてみました。たくさん出てきます。目的が人によって違う、教員の負担が大きすぎる。この話は先ほど倉部さんからもありました。質問でもありましたが、探究のテーマ設定の弊害、いわゆるやらされ感と評価が曖昧。それから、地域・大学・企業との調整の難しさ、コーディネーターの難しさ、高大接続が弱く、大学側も評価しづらい、課題設定が雑

になってしまう等があげられています。AIはネットに落ちている情報しか拾えない限界はありますが、なんとなく的を射ているのではないかと思います。

(スライド49) そして、松下先生からは、今日の午前中にいくつかの「モヤモヤ」の紹介がありました。高校の教員がどれだけ時間と労力をかけるべきなのか、教員はどのような役割を果たせるのか、高大接続のセグメント化に、さらに拍車を掛けるのではないかと、といったあらゆるモヤモヤがありました。今日、ご質問もありましたが、探究があまりにも研究化しているのではないかと、など、様々な「モヤモヤ」があることが見えてきています。

私も、日々色々な「モヤモヤ」を感じています。(スライド50) 倉部先生から探究が特定の先生に負担が偏っているのではないかとという話もありました。(スライド52) 私が、特に最近強く違和感を思っているのは、大学の研究には予算が付いていることが多いですが、高校の探究には予算がありません。国からの予算が取れたところはいいですが、予算が取れなかったところは、先生方は時間だけではなくて自前で身銭を切っていますよね。このような状況で続くのかという話です。あるいは、探究部長さんや進路部長さんのコミュニケーションは十分なのか、探究を部活動として行おうとしても全然広がらないのはなぜだろうとか、日々色々な「モヤモヤ」を感じています。

というわけで、今日は全部拾うことはできませんが、まずはお三方に、今、一番「モヤモヤ」していることを皆さんに投げかけてみたいと思います。その中から1つ選んでいただきまして、今、どのようなことを一番感じておられるのかを順番に聞いていきたいと思っています。(スライド49) 松下先生、まず最初にお話を頂ければと思います。今日、私が4つほど拾わせていただきましたが、一番モヤモヤしていて、皆さんに投げかけたい「モヤモヤ」は何でしょうか。

松下： 私は、個人的には3番目の「高大接続のセグメントに拍車をかけることにならないか？」が、自分の関わり方としては一番気になっているところではあります。高校の先生を見てみると、十分な体制が作れていなくて、特定の先生、力のある先生に負担が偏っています。公立高校の場合ですと、その先生が異動されるとその探究は継続できなくなってしまうという体制に問題があるかと思います。それは、予算にも関係してくると思います。大学の教員も、今は予算が乏しいです。研究費も少ないですが、高校はもっとそうだと思います。

最後の「モヤモヤ」に関しては、先ほど、お答えしたとおりで、もっと多様であるべきだと思いますが、そうすると上のものが付いてきます。多様化したものがセグメント化とつながらないかという、個人的にはそこが一番のモヤモヤです。



杉岡： ありがとうございます。松下先生のモヤモヤを私が回答できるわけではないので、モヤモヤの見える化というところで今日は止めておきたいと思います。

(スライド50) 倉部先生、いかがでしょうか。先ほど、少し例示していただきましたが、これでも結構ですし、それ以外でも100校回って来られて、皆さんに共通している探究の「モヤモヤ」はどのようなものでしょうか。

倉部：(スライド50) そうですね、いろいろ

なところを回っていると、指導体制の格差が大き過ぎると感じます。先ほども述べたとおり、おそらく公立高校と私立高校でも、探究活動に取り組む上での体制にかなり違いがあると思います。探究科や探究を専門にする先生たちのチームがあるところもあれば、ないところもあるし、学年によって方針が違うところもあります。先ほど出てきたように、活用できるリソースも学校によって違います。京都は過剰なくらい大学がありますが、近くに大学がない県も山ほどあります。このような点が一番気になります。

もう一つだけ言わせてもらおうと、午前中の最後に出ていた、「探究が研究化している」というのは、非常に大事な問題提起だと思いました。私が訪問している学校でも、大学進学者がほとんどいない高校もたくさんあります。しかし、そのような高校でも探究をしなさいと言われていて。誰がどのように手を貸して、何をするのかですよね。もしかしたらそういう高校ではキャリア探究に寄せたほうがマッチするのかもしれませんが、どうしても世の中の探究は、アカデミックなものに偏って議論される傾向があります。地元の工務店と連携して、校舎の空き地に建物を建ててみる、というような探究があってもいいと思います。ただ、そうなると、大学はますます力を貸せなくなり、別の企業やNPOなどと、どのように連携をしていくのか、みたいなリソースの話になってくるんですよね。すみません、モヤモヤを深めるだけで終わってしまったのですが、いったんここで終わります。

杉岡： はい、ありがとうございます。それでは、小谷先生にこの2つについて聞いてみたいと思います。その後、ご自身の「モヤモヤ」についてもお話いただければと思います。1つ目は、指導体制が特定のメンバーにどうしても偏りがちであるということです。私が関わっている高校や中学校も同じです。もう一つは、日星高校には当てはまらないかもしれませんが、探究

のテーマが研究に偏り過ぎたり、逆に地域連携に偏り過ぎるといふ偏り問題です。この問題は、小谷先生の高校や今までのご経験で実感としていかがでしょうか。

小谷：(スライド51) まず1つ目については、正直なところ、探究部の先生の仕事は「重たい」という話しか聞かないと思っています。他の学校の先生のお話を伺っても、探究の先生は「楽だ」と聞いたことは1回もありません。私自身、主任になって1年目は、探究部の仕事や自分自身の進め方も分からず、学校全体の進め方も分からなかったのも、ほぼ一人で対応した、という言い過ぎかもしれませんが、大半は自分でこなしていたことがあり、その時は本当に体を壊しそうな勢いでした。私は、家に子どもがいるんですけれども、子どもが風邪で寝込んだ際には、学校を休まないといけないんだけど、休んでいる時にも学校から電話がかかってきて、熱を出して泣いている子どもが近くにいる中で対応しながら、進めていかないといけない現状がありました。今、日本で探究を進めようとしています、全国の先生がこのような進め方をしているのかというところに、すごく「モヤモヤ」とした経験がありました。

2つ目の「研究に偏っているのではないか」という点については、もともとSSHがあったので、その流れで研究に近い探究をされているところが多いのではと思っています。私も、研究に偏らない探究もあっていいと思っていますので、どんどん伸びていってほしいと思います。

杉岡： ありがとうございます。先生のモヤモヤは何ですか。

小谷： 私自身の「モヤモヤ」は、今年2年目で、本校も成長してきた段階ではありますが、本校では生徒の探究は生徒個人の人生を作っていくものだという認識で進めています。高校

での経験がこれからの人生で生きるための時間として、探究の時間を使ってほしいと真剣に思っています。そうなったときに生徒一人一人の個人の最適解を作っていくために、次に何をやっていったらいいのか、どうすれば高校の勉強が本当に有意義なものになるのか、と思っています。そうなってくると、それに付随する評価はどうするのか、資金はどうするのか、といったこともいろいろ思っている状態です。

もう一つ、先ほどの話ともかぶってしましますが、探究部の仕事を進めていく中で、探究部の先生の負担が大きい、重たいという点についても、日々頭を悩ませているところでもあります。

杉岡： ありがとうございます。今日は日星高校の校長先生と教頭先生もお見えですが、探究部の負担を減らすためにはどうすればいいでしょうか。今、政府も日本版「DOGE」と呼ばれる政府効率化省を作って、これからどんどん仕事を削減しようとしています。要は、新しいことをしようと思ったら、何かを減らさないことには増える一方になります。しかし、現場では先生方が皆真面目なので、積み上げ方式でただ仕事が積み上がっていただけになっています。これは行政によく見られることですが、おそらく学校でも同じようなことが起きているのではないかと思います。では、これからは一体どうすればいいのでしょうか。

小谷： まず1つ思っているのは、今はまだ過渡期だと思っています。体制がある一定程度できてしまえば、いろいろな業務がマニュアル化できたり、仕事の割り振りがうまく機能していくので、その段階に持っていくことが1つなのかなと思っています。あとはAI等の活用です。例えば、生徒が発表会に参加するときに、どこに参加したいかを割り振るためにExcelを使用していると、非常に手間がかかりますが、そういっ

たことをITや様々な技術を活用できれば軽減でき、先生方の負担も減ってきて、探究部の仕事もいいと思ってもらえるかと思っています。

あとは、教頭先生や校長先生もおられますが、日星高校は校長先生方も忙しいんです。皆さん忙しく、さらに主任まで忙しくなっているの、忙しいので逃げ場がない状態で、先生方も非常にストレスが多いし、逃げ場がない状態だと思います。先生方の業務を軽減することはできないのかと思います。

杉岡：なるほど。マイクを向ける人を増やさないと、この会話が續かない気がしました。ありがとうございます。

本日は双方向通行で進めたいと言っていましたので、今、「見える化」ができました。単純に、すぐに答えられるものと答えられないものがあります。今日は、冒頭にも申し上げましたが、どのようなモヤモヤがあるのかを「見える化」することに意味があると思いますので、それも含めて答えられるものに答えていきながら、われわれ自身の「モヤモヤ」についても何か意見ができればと思っています。探究関係から進めていきましょか。

(スライド57) 探究活動についてです。実際に指導する教員は一人一人になると思いますが、教員の能力差があまりにも大きいと思います。生徒からは、「先生ガチャ」というような言葉も聞こえてきます。探究活動の目的を全体に浸透させるには、教員一人一人の資質向上、能力向上が重要かと思ひます。これを高校単位、教育委員会単位、自治体単位で対処できるレベルなのかについてご意見を伺いたいと思ひます。正解はないので、「こう思う」という形でかまいません。まずは小谷先生から行きましょか。教員が忙し過ぎると研修を受けたり本を読む時間がない、大学院にも行けないとなつてくると、先生自身もなかなか成長していかない中で、ビデオを巻き戻して再生しているような指

導体制もあるかもしれません。それを乗り切るためにはどうすればいいのでしょうか。

小谷：そうですね、教員一人一人の力量差や能力差ということですが、私の考え方でいくと、先生になられる方は、生徒と一緒に成長できることが嬉しいから先生になっておられると思ひます。これは教科の指導でも、探究学習でも同じだと思ひます。そうなつたときに、先生がやりたいことは探究学習でも教科学習でも大きく変わらないのではないかと思ひます。本校にも探究が苦手だとおっしゃる先生がおられますが、生徒と一緒に成長したいと思ひている気持ちを信じて、そちらに働きかけていきたいと思ひます。どの先生でも、きっと得意とされる部分があると思ひますので、探究には様々な分野がありますが、全部を担当するのではなくて、自分が得意なところを担当していただけるような形にすると、少し負担が減っていくと思ひます。

杉岡：ありがとうございます。私も、探究活動の定義がポイントかと思ひます。総合的な探究の時間や総合的な学習の時間、課題研究を含めて、確かにそれだけだとこれがあるかもしれません。もちろん、釈迦に説法ですが、古典探究や理数探究など、様々な科目の探究があります。私が注目しているのは、教科横断探究を実践している高校です。ある高校では「愛とは何か」というテーマに対して、それぞれの科目で答えていくという方法で実践しておられます。そうすると、先生方の得意分野で探究を表現していくことができるわけです。そのような中でいくと、得意なところで勝負していく、伴走していく。無理なことはあえてやらない、挑戦しないことも1つの解なのかもしれません。

倉部先生、このテーマについていかがでしょうか。

倉部： 今、出てきたように、教員が得意な分野を担当するのも一手でしょう。ほか、大学で初年次ゼミを複数の教員で受け持ったりする際、それぞれのクラスで出てきた悩みや、こんな学生がいたということ、ゼミの後に教員間で共有する時間を作ったりしますよね。毎回行う必要はありませんが、ああいうものを大事なタイミングで入れたりすると、結果的にはチーム力が上がったりするのかなと思った次第です。

杉岡： そうですね。ありがとうございます。チーム探究ではないですが、どのようなチームを作るかという話ですね。松下先生、このテーマはいかがでしょうか。

松下： 先ほどの内容ともつながりますが、高槻高校の場合だと、私が関わっていた頃は、3クラスの探究を4人で担当しておられて、そのうちの1人はティーチングアシスタントで、あとの3人が高槻高校の正規の教員の先生でした。その4人で担当しておられたので、負担が一人に偏ることはありませんでした。自分一人ですんどさを抱えているのが一番しんどいと思うんですけども、お互いに情報を共有できるとだいぶ軽減できると思います。ただ、その協力関係が悪いとうまく機能しませんけれどね。

杉岡： そうなんですよね。これは大学でもよくあることですが、最後は人間関係が物を言います。確かに、ここを乗り越えるのが、難しいところではあります。ありがとうございます。（スライド55） 探究関係の質問が続々と寄せられているので、全部に対応することはできませんが先ほど、評価の話がありました。これもChatGPTにも書いていました。また、本日、松下先生からポートフォリオの話もありましたし、先ほど控室でキャリアポートフォリオと探究は全然つながっていないという議論もしておりました。探究的な学びでどのような力が身に付く

のか、またうまく行っているのかなという中で、不安を抱えている学校も多いと思います。そうした中で学校は、子どもたちがうまくいっているかということの評価をしています。あとは、学校自身の評価もありますし、生徒の評価もなかなか難しいです。今はループリックなどを使いながら様々な方法でされておられますが、今の所「完璧なこれ」というものに出会ったことがありません。それも含めて、生徒個人の探究をどう評価していくのか、先生だけで評価していいのかどうか、入試の話にも繋がっていくのかもしれませんが、学校全体としての高校の頑張りを中学校にどのように伝えていけばいいのか、これも1つの評価だろうと思います。

私のほうから1個だけお話すると、ある高校では、大学の教員が私しか行かないような発表会があります。一方、ある高校では60人から70人、大学の関係者だけで10人以上、地域の方々も巻き込んで報告会に来られる学校もあります。そうすると、生徒たちは混乱もするかもしれませんが、本当に多様な意見が出てきます。評価軸としての多面ではなくて、多様な人たちに集まってもらうことによってその活動を評価していく、このようなアプローチもあるのではないかと思います。この探究の評価は、とても難しい議論だと思います。松下先生は専門家であります。この問題にはどのような議論があるのかを含めて、ご助言を頂けますでしょうか。

松下： これはみんなが悩んでいるところで、明確な答えはありません。私も、今、杉岡先生が話された内容くらいしか知らないです。教員だけではなくて、大学や地域の方など、多様な見方を取り入れていくことです。ポートフォリオも、いろいろなポートフォリオがあって、JAPAN e-Portfolioが失敗したのでイメージが良くないですし、キャリアポートフォリオもあまり活用されていません。私は、基本的には、生徒たちが作ったものがちゃんと残って、最終的に

作品として仕上げていく、変に数値化しないで、そのプロセスが見えるような形でそのものが残っていくようなポートフォリオがいいと思います。数値化してしまうと、元のもので、それがどのように評価された結果、その数値になったのかが全く見えないからです。しかし、元のもものがちゃんと残っていれば、人によって評価のされ方が違ってそれがわかります。

評価は主観的なものだと、私は言い続けています。「客観テスト」と言いますが、客観テストの「客観」は採点の方法が客観的というだけで、テストにどんな問題を出すかは問題を作る人の主観が入るわけですね。したがって、基本的に評価は全て主観的なものであると言えます。あまり厳格さを追及し過ぎないほうがいいと思っています。ただ、一人の先生だけで行くと偏ってしまう場合があるので、そこは間主観性というか、何人かの先生の意見を取り入れて、最終的に平均化しないといけないかもしれません。合意ができれば一番望ましいですが、一人の先生の偏った意見にならないようにしつつ、主観的であることを変えようとは思わず、客観性を求め過ぎないようにするのが重要だと思っています。

杉岡： ありがとうございます。非常に勇気を頂けるご発言だったのではないかと思います。どう頑張っても客観化しても主観性は廃除できませんので、そうであれば、私は、今後、たくさんの方の意見を聞くことによって中立性を担保することが重要ですね。これは、主権者教育にも通じるところがあるのではないかと思います。

倉部先生、どうでしょうか、評価は難しいという点については、さまざまな声もあるのではないかと思います。

倉部： そうですね、ここについて私が言えることは、あまりないと思います。でも、ループ

リックも一生懸命作成されていらっしゃると思いますが、個人的には、その学校が掲げているスクールミッションなどどのようにつながっているのかという形で評価されると、評価される側も納得感があり「本校は、こういう教育を行っているんです」ということにもつながって、いいのかと思います。

杉岡： それが分かりやすいですね。今、大学では「3ポリシー」と言われていますので、シラバスを作成する際にも3ポリシーとの関連を書く欄があります。それも含めて、ポリシーを出しているのであれば、そこに照らし合わせて、「こんな力が身に付いた」など、それによって、評価に納得感が得られるのではと思いました。小谷先生、評価する立場でもあると思いますが、いかがでしょうか。



小谷： 本校も評価の方法を考えようと思っていますけれども、まさにグラデュエーション・ポリシーに絡めたもので、それぞれループリックを作ろうかなと思っています。評価を作る際に、教員なので、教員が見たときに生徒の能力を定量的に評価する軸を作りたいと思いがちですが、探究学習でそれをやってしまうのは非常に難しいところがあります。ある程度、定性的なものでいいかなと思っています。

もう一つは、生徒が「どのように評価されているのか」「今、自分がどの位置にいるのか」を分

かるようにすることが評価の持つ、もう一つの大事な意味だと思しますので、その点を大事にして作っていきたく私は思っています。

杉岡：なるほど。ありがとうございます。

残り時間が10分ほどとなりましたが、高大連携もこのセッションのテーマであります。このテーマそのものにつきましては、来年度のフォーラムで取り上げてみたいと思っていますので、今年は触りだけにしようかなと思います。少し読み上げます。(スライド58)ここ数年で、教育界隈で探究活動は成熟してきたと感じています。そのおかげで、都会の国公立大学で簡単な探究活動では点数が取れないとか、地方公立大学ではまだいけるとか、そんな話も聞かえたりします。成果というものを注目しなければいけないわけですが、大学側がこういった探究をやってきた生徒たちをどう見ているのでしょうか。総合型選抜や学校推薦選抜等々が一番関係してくるかなと思いますので、ここは専門家の松下先生をお願いします。

入試のための探究は、主客転倒してしまっていると思います。しかし、入試や就職を全く意識せずに、探究を切り出して取れると思うのは視野狭窄だと思います。うまいことつながっていく、一度食べて二度おいしいといったところですが、それをつなげるためには大学側がこれをどう思っているのかということも、探究と大学の研究は近いものであるという話を頂きました。先生はこのあたりの論点をどのようにお考えなのか、お聞かせいただけますでしょうか。

松下：これに関しては、生徒の所属する高校自体が、さまざまなきらきらした活動を行っている場合がありますよね。例えば海外での研究発表やフィールドワークです。そういうものがかさ上げされることがあると思います。そうすると、その子がやっている探究ではなく、高校自体がやっていることで、素晴らしい探究活動を

やっているかのようになってしまいます。京都大学教育学部ではそこは差し引いて考えるようにしていると思います。あまり詳しくは言えませんが、かさ上げされているのではなくて、普通にやっていることであっても、先ほどの菅野さんではないですが、そこでどのような問題を抱き、どのように考えて、やり方を工夫してその活動をしたのか、そのプロセスを自分の言葉でちゃんと語れているかを見るようにしているはずですが、ただ、これはどの大学でもそうだとはいきれないところがあります。

杉岡：ありがとうございました。今の先生の話聞いていて「ブラインドオーケストラ」という話を思い出しました。オーケストラの採用の際に、カーテンを掛けずに演奏者が見える状態で演奏すると男性が多く採用されます。一方、カーテンをして演奏だけで採用すると女性の採用が多くなったという実験がありました。すなわち、高校名でバイアスが相当かかってしまって、主観を排除できないということです。なんとなく下駄を履かせてしまうことは起こりがちです。それをしないことが大事で、そのためには生徒が探究で何を身に付けて、なぜこのテーマにしたのか、そこから何を学べたのか、です。それは教員が試されますし、そういうことをちゃんと徹底していかないと、「この高校なら大丈夫だ」という相場が勝手にできてしまって、入学してみたらそうではなかったという、お互いに不幸な結果になってしまいます。これは、本当に気を付けなければいけないと思いました。

小谷先生、大学側には「ここを見てほしい」や、高校側にも「大学側からどのように評価してほしい」などあると思いますが、どうでしょうか。

小谷：そうですね、高校側からだとなかなか難しいですね。大学が出されるポリシーなどに、「こういう学生を求めています」というようなことが結

構書いてあると思うので、そこを基にして、「この大学だったら生徒の性格に合っている」といった選び方ができるようになると、ミスマッチの防止になり、高校側も推薦しやすいのではと思います。

杉岡： ありがとうございます。抽象化のはしごをどうかけるかとか、生徒の性格もありますよね。特にグループ探究では、必ず頑張る生徒と頑張らない生徒とが2：6：2の割合で出てきますので、生徒の性格などをちゃんと考察し、その生徒に合った進路、就職も含めて伴走してあげるといいと思います。ここは、なかなか力量が問われます。倉部先生、この問題はいかがでしょうか。総合的な探究活動を含め、探究活動全般や入試での評価も含めたご意見をお伺いしたいです。

倉部： これは、総合型選抜で探究活動のことを聞く大学も増えてます。「探究型入試」と言われるものも、さまざまなパターンがあります。直接的に高校3年間の探究活動の成果を問う入試もあれば、間接的に探究活動で鍛えられているであろう力を測るような、答えのない問題を投げってくるような入試もあります。そのため、大学側としては、「こういうものを計りたい」というものを一生懸命、出そうとしているとは思いますが。ただ、高校の先生方や生徒からすると「分からない」というのもそのとおりでと思います。ここは答えがあるというよりは、改善の余地がある部分だろうと捉えています。たまに桜美林大学など「この12のポイントで評価します」と、はっきり書いてある大学もあります。それが絶対的な正解かは分かりませんが、今、いろいろ試行錯誤が始まっている過渡期だと感じます。

杉岡： ありがとうございます。私も毎年、総合型選抜や学校推薦選抜の面接官をしながら、調査票や自己アピール書を読みますが、裏

面の一番上のところに探究の欄があります。そこに書いてあることは相当落差があると感じています。今年を受験生は、総合的な探究の時間が必修化された世代の第2期になります。その子たちを見ていても、カリキュラムが変わったからといって入学してくる層の平均値が抜本的に変わったかと言われると、定性的にも定量的にも言い切れないという気がしています。まだまだ試行錯誤なんだろうなと思います。ありがとうございます。

それでは、先生方、お時間もだいぶ迫ってまいりましたので、最後に、先生方には質問全体をご覧になっていただきまして、「これはぜひとも一言答えたい」と思うものに答えていただき、最後にしようかなと思います。ざっとご覧になっていただけますか。全ての質問を拾いあげる時間はありませんが、これを見える化できた部分だけでも意味があると思っています。こんなことを悩まれていたり、こんなふうに思っているのかがよく分かります。AIの話、入試の話もあります。「探究戦争」「探究ガチャ」もあります。やる気のない生徒に探究活動をさせることの意味、難しいですよ。これは「京都大学」と書いておられますので、松下先生をご指名かもしれません。高大連携の附属校の課題ということでございます。

倉部： 答えではないですが、先ほど、探究を経験した生徒が大学進学後、どうなったかを知りたいというご意見がちらっと見えたような気がしました。確かに伝えたほうが良いような気がします。探究を経験しただけの意味はあったのかどうか、今後の可能性を示す一つのヒントになると思います。

杉岡： ただ、研究に偏り過ぎた探究というキーワードが午前中から出ていますが、そこを是正していくためにも、「キャリア探究」という1つのテーマを頂きました。探究というのは受験

のためでも、文部科学省や学習指導要領に対応するためだけのものではなく、思考回路や実践があれば、生徒のためになるということが伝わっていくということは、まだまだ余白があるということがよく分かります。

小谷先生、1個選んでもらってもいいですか。今日は、3つ、4つありますが、どれか選んでください。

小谷： 先ほど、大きな字で書いてあった「嫌々やる」をお願いします。

杉岡： 「嫌々やる」ですか、行きましょう。

小谷：(スライド65) 「やる気のない生徒に探究学習を嫌々させることの意味が見出せていません」ということですが、本校の場合も勉強が嫌な生徒がたくさんいて、そこで嫌々やらせるのにどんな意味があるのだろうというのは、私も個人的に思っていました。本校で好きなことを基軸にやっついこうと思った大きな原因として、嫌なことではなくて好きなことを基軸にしたら、本人がすごく「やる気」になるのではないかと思ったことがあります。この「やる気がない」生徒が一人なのか、複数なのか分かりませんが、なぜやる気がないのかを考えたときに、探究が嫌いだったら好きな探究をやらせてあげればいいし、生活全般においてやる気がないのであれば、それを解決してあげないと、その子がこれから辛い思いをしてしまうので、そこに寄り添ってあげないといけないと思います。やる気が出るようなことを一緒にやっついってあげることがいいのではないかと思っています。

繰り返しになりますが、私は、探究の時間を「人生を考える時間」にしてほしいので、その時間が嫌だと思って後ろ向きになってしまわないようにしてあげてほしいと思います。

杉岡： ありがとうございます。私も一言だけ

コメントさせていただきます。私の理想の探究は恋愛に近いと思っています。好きな子ができたら、嫌々考えないですよね。「今日は、何をしているのだろう」とか、LINEをしたら「既読がなかなか付かないな」と考えますよね。自分が本当に解きたいテーマであれば、思わず考えてしまうでしょう。現状は、まだそこまで行っていないということです。そうなると、探究活動は進路のためではなくて、そんなテーマと出会うためにはどうすればいいのかが重要になります。人から押し付けられたものは必ず飽きてしまいます。自分から出てくるものでなければ絶対にテーマにならないと思います。ミニ探究は別です。

倉部先生、どれか一つだけ最後にコメントを頂ければと思います。

倉部： 先ほどの嫌々に重ねて、になりますが、このあたりは皆さんの関心も強いかと思えます。私はキャリアや進路の教育に関わる人が多いので、共通点があるように感じます。「探究のテーマが決められません」と、「やりたいことが見つかりません」という悩みは、実は同じ問題を抱えているので、それなら両方を組み合わせて最適化できるようなやり方はないだろうかと思ったりします。企業さんがコーディネーターしてくれる合同ガイダンスのようなものを探究活動の場でできないかなとか、どちらにしても行われているわけですから、個人的にはそういうところに可能性を感じています。

万能の答えではありませんが、1つの意見としてお話ししました。

杉岡： 私、今年から自治会の副会長を務めているのですが、草刈りなどがあるわけです。皆さん、嫌々参加しているわけです。これは3Gとって、義務と犠牲と我慢です。こういったものだけでやっているものは、なかなか長続きしにくく、徐々に参加者が減っていきます。そこ

で、そこに楽しみを少し加えてみます。例えば、スポーツ的な要素を取り入れて、対抗形式で草刈りをやってみるだけで少し変わります。ですので、先ほどお話のあったように、少し組み合わせを変えるだけで面白くないものが面白くなったりする、このあたりは工夫の余地が残っている領域ですよ。ありがとうございます。

最後になりますが、松下先生、1つだけお願いいたします。

松下： 1つでなくてもいいですか。私への質問は、いいね順に並んでいますが、最初の方のものにまずお答えします。中高生から唐突にメールで探究の相談をされて、「モヤモヤ」するという内容のものが、Xでいっぱい流れているらしいです。これは、私自身も「モヤモヤ」しており、私のところにもかなりの数の相談が来ます。あとは「京都大学を案内してください」というものもあります。大学教員は、よほど暇だと思われているのかと思うんですけども(笑)。自分の研究テーマに直接関係しているものには、できるだけ応えるようにはしていますが、対応するのもなかなか大変です。インタビューを行った結果、探究の結果がどのようになったのか、彼らその結果を自分でどう表現したのかをちゃんと報告して下さったらいのですが、そうならない場合もあります。お礼のメールが来て、それで終わりということも少なくありません。せっかくインタビューしたのであれば、それがどのようにまとまったのかを返してほしいというふうに思います。

それから、名指しで京都大学が出ていた箇所についてです。「京都大学が、どのような必要性やビジョンの下で高大連携を考えておられるのか」という内容でした。これは、先ほど、ELCASの例を出しましたが、かつては高校生が週末に大学に来て、大学の教員や院生と一緒に研究を行っていました。また、特色入試についていえば、東京大学が秋入学の議論を始めたと

きに、当時の松本(紘)総長が、秋入学以上に重要なのは、探究で育ったものがそのまま大学につながられるような仕組みを作ることだということで、特色入試が作られました。当時は、堀川高校をはじめ高校での探究学習が広がっていた頃でしたが、いくら高校で探究を行っても大学入試で一度途切れて大学に入学してきます。この1年から1年半がすごくもったいないので、大学入試のためだけの勉強をしないで入学できるような仕組みを作ろうとしたわけです。ELCASの開始は特色入試より早いですが、特に理系の先生方は非常に熱心にELCASをやっておられます。高校生の若い感性で、一度興味を持つとすごく突き進んでいく生徒がいるので、そういった生徒たちに早くから研究に触れさせたいという気持ちが強いのだらうと思います。

松下： あと二つお答えしたいと思った質問があります。一つは「探究ガチャ」です。高校によって探究にすごく力を入れているところと、そうではないところがあります。プレゼンも高校でしっかりやった経験がある学生もいれば、大学に入って初めてPowerPointに触るという学生もいました。最近ほとんどいなくなりましたが。その格差をなくすように、私は1年生の初年次ゼミで最初にPowerPointの演習を入れたり、レポートの書き方を教えたりしてきました。そこをそろえないと、最初のスタートラインからかなり差がついていることがあることは実感しています。



それから、もう一つは、高校の先生からのご意見で、大学に入って探究がどうなっているかを知りたいとありました。先ほど、倉部先生もそれに答えるべきではないかとお話しになりました。高大接続の研究をしている私の指導生が、SSHで高校時代にかなり探究をやっていた人たちが京都大学の授業をどう思っているかについてインタビューをしたことがあります。先ほどの松本総長の話と食い違うように見えるかもしれませんが、京都大学の理系のカリキュラムは、大学の低学年では数学や物理などを講義でしっかり学ばされ、高校の探究のように自分のテーマで研究をするのは卒論になってから、場合によっては修士論文でようやく本格的にできるか、くらいのイメージです。

ある学生は、「高校時代に一通り自分で問いを立てて、自分で結論を出すところまで経験したので、今、取り組んでいる部分的な実験が、どういうところに位置付くのが分かる」と言っていました。他に、「同じ講義でも、最先端の研究をやっている先生が、自分が得た研究成果を講義されているのは、教科書の中身を話すだけの講義とは違う」と話す学生もいました。つまり、高校で探究をやっていたからといって、大学の研究にすぐに接続するというのは思い込みで、そうではなくて、大学に入ってしばらくは、また基礎訓練みたいなことをさせられるのです。でも、一通り高校でやったことによって、そ

の先にあるものの見通しが持てます。特に理系の場合は、そういう傾向があるかと思います。

杉岡:(スライド17) 先生、どうもありがとうございます。今日、午前中にご紹介いただいた対話型論証モデルや、ミニ探究という言葉もありましたが、受験のためではなくて、自分のために型を回してみる。それが高校で回し、小学校、中学校、高校、大学とちょっとずつレベルを上げていけそうです。レベルを上げていくというのはなかなか難しいですが、自分の熱意がどんどん上がっていくようなことを繰り返していきながら、最終的には問題解決思考だったり、あるいはデザイン思考だったり、自分の武器にしていけるような探究になるのであれば、必修化した意味が出てくるのではないかと感じました。

ということで、たくさん見える化にご協力を頂きまして、ありがとうございました。その1つの回答が、おそらくこの書籍(「探究的な学び実践事例集 次の一歩への道しるべ」)を読んでいただくといいのかなと思います。23の事例が書いてありますので、全ては片付かないかもしれませんが、何か見えてくるものがあるのではないかと思います。ぜひともご覧いただければと思います。

(スライド72) これで、最後、締めましょうか。デューイの話がありましたので、持ってきました。「正しく問うことができれば、問題の半分は解決したも同然」ということを言っておられます。問いの重要性ですが、探究という言葉が、学習や探究、研究と、いろいろと変わっていくわけですが、問うことは言葉としては変わっていないわけですが、社会人になっても問い続けるわけですが、問うことの重要性は、多分、小学校、中学校、高校、大学、社会人を越えて共通していると思っています。問うことの重要性と面白さ、そして難しさ、このことをコミュニティとしてこれからも共に考えていきたいと感じまし

た。

まとめにならないまとめですが、パネリストの皆様、最後、拍手でもって締めたいと思います。どうもありがとうございました。

スライド 1

**倉部史記 (くらべしき)**

企業の広報ウェブサイト  
制作会社勤務

↓

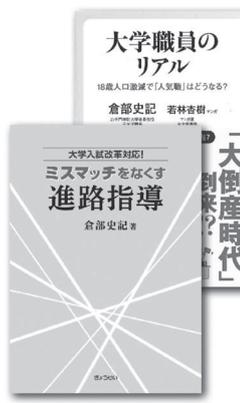
工学院大学・教務部  
新宿教務課 職員 **大学生**

↓

早稲田塾総研 主任研究員  
兼 大学連携事業担当 **高校生**  
兼 新卒社員採用責任者 **就活生**

↓

**【現在】**  
高・大の間に挟まりながら、中立の立場で高大接続に関わる



スライド 2

**現在の肩書・取り組み**

- 専門は進路学習・キャリア教育、高大接続
- 追手門学院大学 客員教授
- 情報経営イノベーション専門職大学 客員教授
- NPO法人LEGIKA「WEEKDAY CAMPUS VISIT」認定コーディネーター

**【兼任・公務実績】**

- 三重県「県立大学の設置の是非を検討するための有識者会議」有識者委員 (2021-)
- 三重県立看護大学 高大接続事業 外部評価委員 (2015-)
- 文部科学省「教育と研究の充実に資する大学運営業務の効率化と教職協働の実態調査」有識者委員 (2020)
- 文部科学省 大学教育再生加速プログラム【AP】(入試改革・高大接続分野) ペーパーレフェリー (2014、2016)

スライド 3

**「進路指導」がテーマの講演や研修をしています**

独立行政法人大学入試センター  
 全国高等学校進路指導協議会  
 青森県高等学校教育研究会 進路指導部会  
 埼玉県高等学校進路指導研究会  
 茨城県高等学校教育研究会 進路指導部  
 千葉県高等学校教育研究会 進路指導部会  
 千葉・千葉南職安管内高等学校就職対策連絡協議会  
 東京都高等学校進路指導協議会  
 東京私立中学高等学校協会  
 栃木県高等学校教育研究会  
 京都府立高等学校進路指導研究協議会  
 大阪府高等学校進路指導研究会  
 兵庫県高等学校進路指導研究会  
 高知県進学協議会  
 熊本県高等学校進路指導研究会  
 鹿児島県高等学校進路指導研究協議会 **ほか多数**

スライド 4

**講演に呼んでいただいた高校の例**

■北海道・東北

- 旭川明成高等学校
- 北海道岩見沢東高等学校
- 北海道北見緑陵高等学校
- 北海道登別明日高等学校
- 北海道函館中部高等学校

• 東陵高等学校

• 秋田県立秋田北鷹高等学校

• 福島県立光南高等学校

■毎年、全国80~100校ほどの高校で、進路講演を実施  
 ・進路多様校、定時制、通信制等様々な高校でも

スライド 5

- 長崎県立諫早高等学校
- 熊本県立済々黉高等学校
- 熊本県立第一高等学校
- 熊本県立八代高等学校
- 宮崎学園高等学校
- 鹿児島県立開陽高等学校 (通信制)
- 鹿児島県立錦江湾高等学校
- 鹿児島県立種子島中央高等学校
- 沖縄県立具志川高等学校
- 沖縄県立久米島高等学校

■毎年、全国80~100校ほどの高校で、進路講演を実施  
 ・進路多様校、定時制、通信制等様々な高校でも

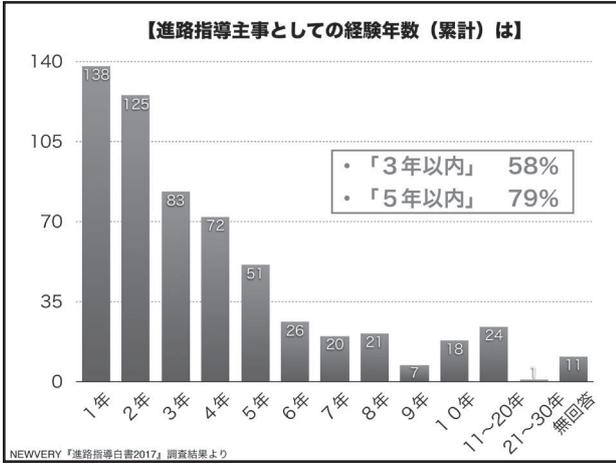
■2024~2025年の2年間で  
 京都府内の高校では計27回の進路講演・教員研修を実施

スライド 6

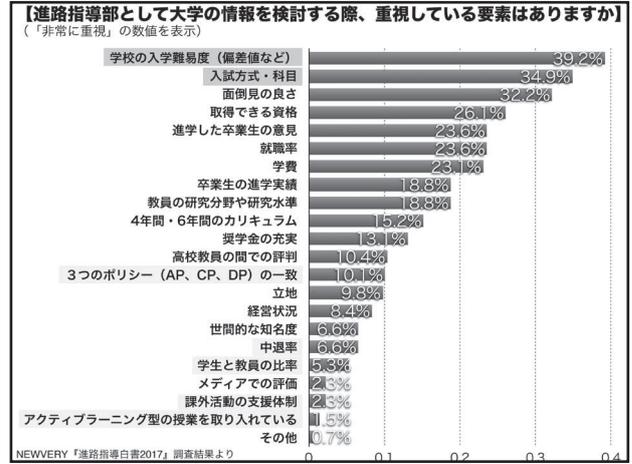
**NEWVERY (現・LEGIKA) は、全国の高校の進路指導主事を対象に調査を実施。**



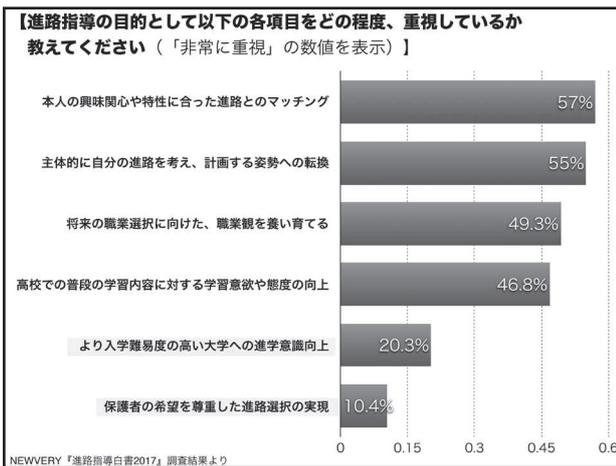
スライド 7



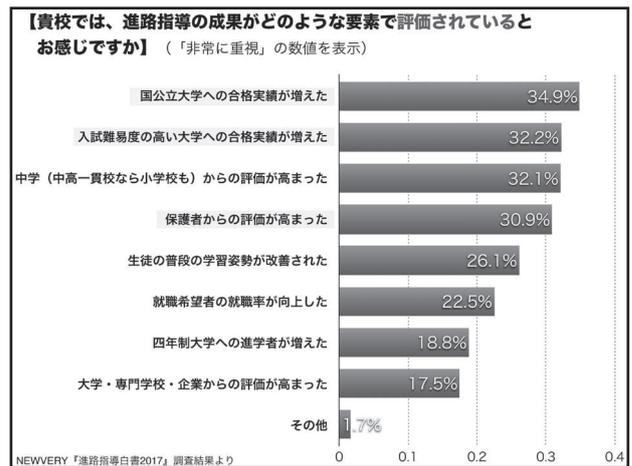
スライド 8



スライド 9



スライド 10



スライド 11

### 進路指導を進めていくにあたって、課題だと感じることはありますか（自由記述）

- ・ 教員の意識が同じ方向に向いていない
- ・ 職員の共通理解を得ることが難しい。
- ・ 教員の生徒へのアドバイスが一貫せず、無責任な言動をする教員が野放しになっている進路指導としての役割が骨抜きにされてしまっている。
- ・ 教員集団の意志統一
- ・ 学年主導で計画されるものもあり、統一感がない。
- ・ 学年や担任によって指導に差が出ること。
- ・ 進路指導部としては十分であるが、学年、学科の連携不足で非効率である
- ・ 学年における進路指導が不十分である学年もある。特に1学年においては、初期指導が大事であると感じているのだが、進路部として関わりにくい。
- ・ 教員間（担任間）の温度差
- ・ 教員間の温度差、昔の指導方法のままの教員の存在。最新の情報を取り入れない教員
- ・ 教員の考えの古さ、面倒見の良い教員が少ない。
- ・ 場当たり的、その場のみになっている。これは時間の問題ではなく、各教員の力量の問題です。
- ・ 教員の意識の低さ。

NEWVERY「進路指導白書2017」調査結果より

スライド 12

### 倉部に来る「高校での進路講演」依頼の例

ご講演時間は14：00～15：00でお願い致します。  
内容につきましては、

**モチベーションアップについて**  
**基礎の大切さ**  
**地方国立大学の魅力**  
**ポートフォリオについて** 等

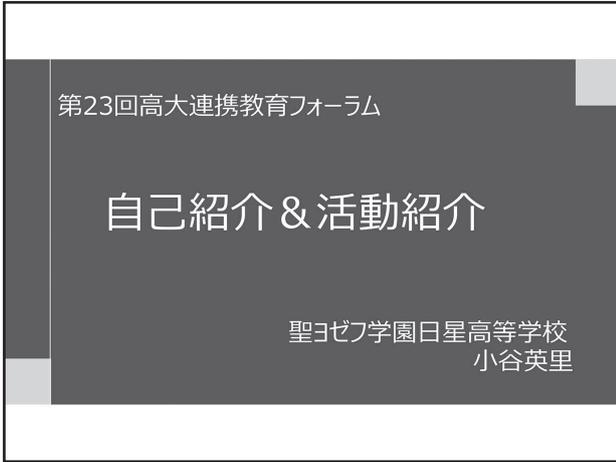
高校側は、学年の進路目標である「一つ上の高い志を持たせる」に沿って、モチベーションアップなど、生徒の頑張りにつながるような講演会を目的とされているようです。  
（後期試験を受けるために最後まで粘ることが大事 など）

スライド 13

**倉部に来る「高校での進路講演」依頼の例**

本校はほぼ全員に  
国公立大学の受験を目指させる学校ですので、  
今から「私立大学受験」や「推薦入試」の話は  
特にされなくて結構です。

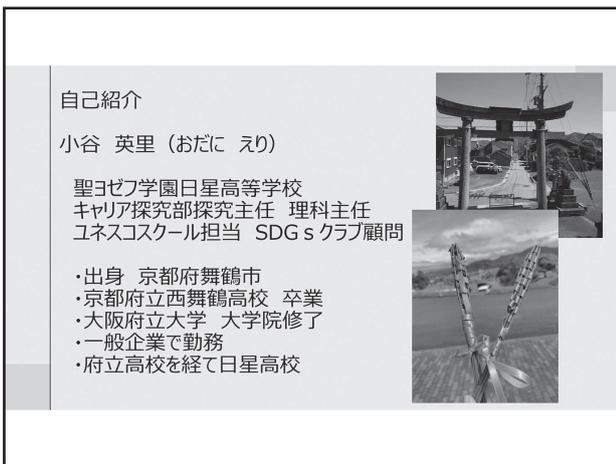
スライド 1



スライド 2



スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7

聖ヨゼフ学園 日星高等学校

(3) 立地

舞鶴市HP

7

スライド 8

聖ヨゼフ学園 日星高等学校

(3) 立地

舞鶴市HP

舞鶴市勢要覧2020

8

スライド 9

聖ヨゼフ学園 日星高等学校

教育理念 Educational Philosophy

はつきり言っておく。  
わたしの足跡である  
この国を赤きい者の一人にしたのは、  
わたしにしてくれたことなのである。

マタイによる福音書 23-40

9

スライド 10

聖ヨゼフ学園 日星高等学校

グラデュエーションポリシー

“0から1を割り出す”ことができるために必要な養うべき4つの資質

主体性	協働性	探究性	社会性
<ul style="list-style-type: none"> <li>行動する</li> <li>批判的に考え発言する</li> <li>対話でつくる</li> <li>失敗から学ぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己を見つける</li> <li>大らかで応じ心</li> <li>感謝の心を大きくする</li> <li>互いを尊重する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>好きを深堀りする</li> <li>生涯の問いを追求する</li> <li>良いものを見つけ出す</li> <li>新しいことの見識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な文化理解</li> <li>地域の魅力を活かす</li> <li>社会に貢献</li> <li>社会を支える</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>思考する教室づくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己理解</li> <li>他者とつながる (SEL)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>探究を軸にしたGFT</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外とつながる、外から学ぶ</li> </ul>

10

スライド 11

聖ヨゼフ学園 日星高等学校

「新時代に対応した高等学校改革推進事業」採択校 全国で7校のみ

「高等学校DX加速化推進事業 (DXハイスクール)」採択校

11

スライド 12

聖ヨゼフ学園 日星高等学校

- 来年度、新学科「地域未来科」を開設予定
- 今年度より2年生選択科目「地域未来学」をスタート
- 地域に根差し、PBL (プロジェクト型) + リサーチ型探究を実践

12

スライド 13

2. 地域未来学とは

- ・対象：高校2年生（選択制）
- ・目的：地域課題を自らの問いで探究
- ・学びの特徴：
  - ① プロジェクト型（PBL）
  - ② 研究型（リサーチ型）
- ・支援：教員＋外部支援者による伴走

スライド 14

3 探究学習の流れ

スライド 15

4. 今年度の探究テーマ

- ・舞鶴の魅力を含めた帽子作り
- ・BINGO大会
- ・じいちゃんばあちゃんのリフレッシュの場を作りたい！
- ・舞鶴茶の新しい魅力を発信する商品開発
- ・おにぎりプロジェクト
- ・舞鶴版ITO
- ・フードロス減らすために...
- ・球技大会を開催
- ・歌を通して地域の人と繋がろうプロジェクト

スライド 16

文部科学省  
教育課程企画特別部会  
**論点整理**  
令和7年9月25日  
中央教育審議会  
教育課程企画特別部会

スライド 17

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた  
「自らの人生を能取する力」と「民主的で持続可能な社会の創り手」育成（今後の検討イメージ）

「好き」を育み、「得意」を伸ばす × 当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる

【各教科等での検討イメージ】

<p>課程設定の充実</p> <p>個別・個人探究</p> <p>総合</p>	<p>生きて働く「確かな知識」の習得</p> <p>興味・関心の育ち</p> <p>教科「学習」の意義を再考</p> <p>自分の意見を表現する活動の充実</p> <p>探究的な学習を持つ学習活動の充実</p> <p>算数・数学の学びを自発的に深められるよう段階的指導（算数・数学以外の学習活動も取り入れる）</p>	<p>児童生徒主体のルール</p> <p>形態や学校生活改善、行事の創造等の明確化（みんなが学びやすいルールや規範を構築していく）</p> <p>納得感を生み出し、よき文化（安齋は多数決の原則や少人数制の原則）</p>	<p>考え、議論する</p> <p>課題の取組</p> <p>主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、対話的・協働的な学びの場を創る</p>
---	--	---	--

多様な学びを一人一人の学びに、多様な学びを一人一人の学びに、多様な学びを一人一人の学びに

学びをデザインする高度専門職としての教師  
「強固な専門性」を基にした教員教育課程による余白

デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備  
総合的な学習の場を確保

スライド 18

学び合い・育ち合いの循環

- ・生徒の学び → 地域の実践 → 地域の成長 → 生徒の成長
- ・地域と学校が共に未来を創る

スライド 19

**課題 好きから社会へ**

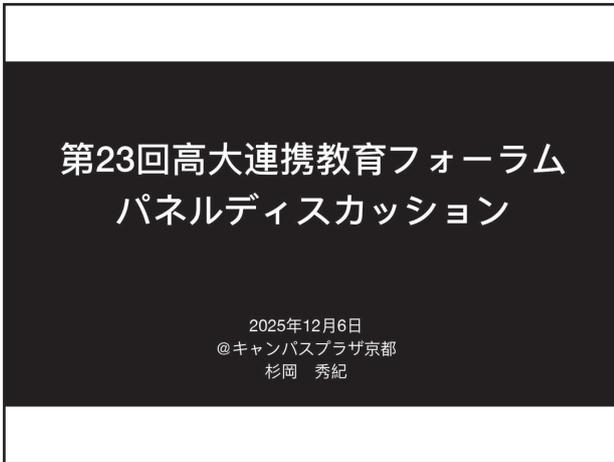
**現状**  
自分の「好き」や「関心」から行動に移す力は育ってきた。  
仲間と協働して地域で活動する事例も増えている。

**今後**  
行動を「社会貢献」や「地域課題の解決」につなげる視点の強化。  
地域のウェルビーイング（みんなが幸福に生きられる状態）を意識した探究へ。  
自分の成長と他者の幸せを結びつける「共創の探究」へ進化。

スライド 20

ご清聴ありがとうございました

スライド 1



スライド 2



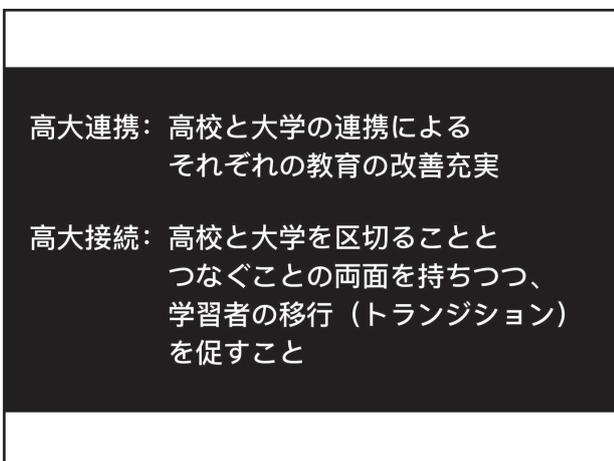
スライド 3



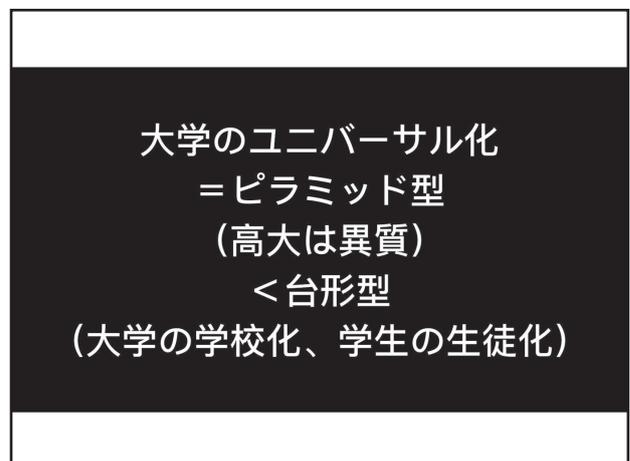
スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド7

2014 高大接続答申  
(三位一体改革)  
↓  
しかし、議論は入学者選抜の議論  
のみに焦点化されていく

スライド8

「セグメント化」  
(高校から大学への学習者の移行  
パターンが細かく断片化し、多様  
な高大接続が併存)

スライド9

高大接続のセグメント化  
×  
大学の高校化・高校の大学化

スライド10

「教育接続」  
(入試以外の教育内容・方法や  
学力・能力も含んで接続)

スライド11

エリート選抜  
(一般選抜、学力AO)  
と  
マス選抜  
(科目少の一般選抜、学校推薦、AO)

スライド12

母親学歴と進学率

スライド 13

地域間・ジェンダー間格差

スライド 14

【探究学習のキーワード】  
 「問題（問い）」  
 「調査・観察・実験＋思考・判断（仕方）」  
 「結論（答え）」

スライド 15

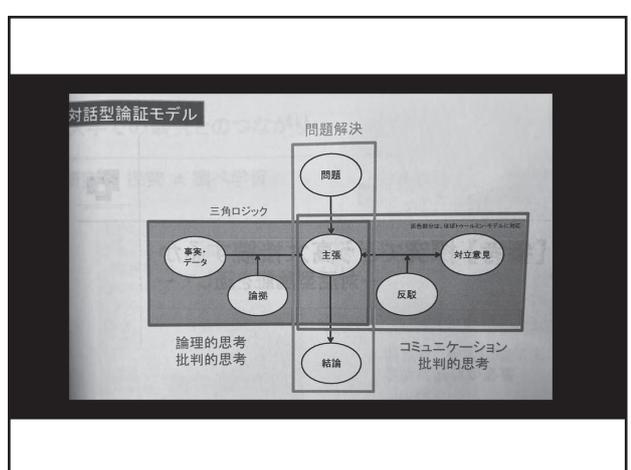
【探究実践のポイント】

- ・ 教科と総合の関係
- ・ テーマと問いとの関係
- ・ 探究のノウハウの教授法、学習法
- ・ 教師の役割
- ・ 探究の成果の可視化

スライド 16

【探究と研究】  
 ほぼ同じだが、研究には新規性と学術的価値がさらに求められる。

スライド 17



スライド 18

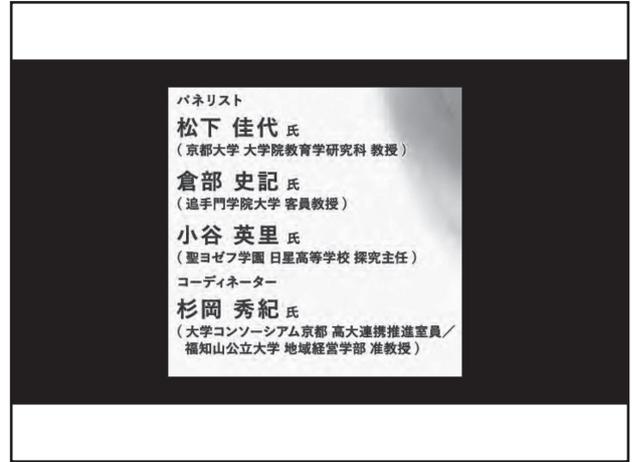
【杉岡 秀紀 自己紹介】

- ・ 大学コンソーシアム京都高大連携推進室室員 (コーディネーター)
- ・ 福知山公立大学高大連携委員
- ・ 京都府教育委員会スマートAP講師
- ・ 同 WWLサミットコメンテーター
- ・ その他高校15校（京都・兵庫・滋賀・岡山）、中学校3校（京都・兵庫）の探究に日々伴走。

スライド 19



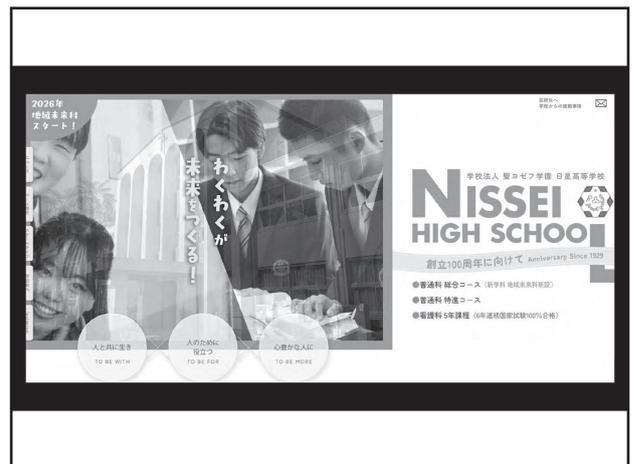
スライド 20



スライド 21



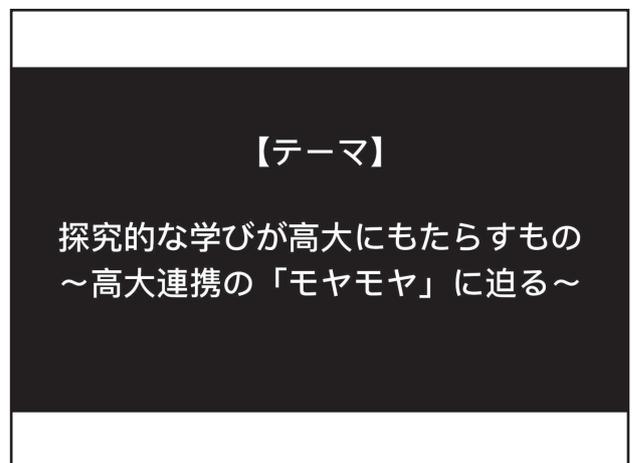
スライド 22



スライド 23



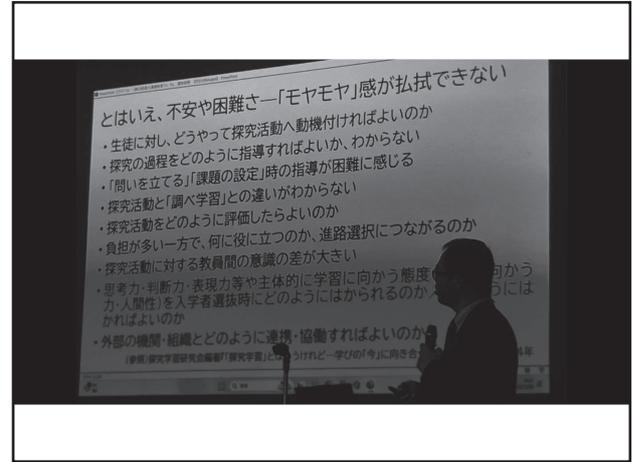
スライド 24



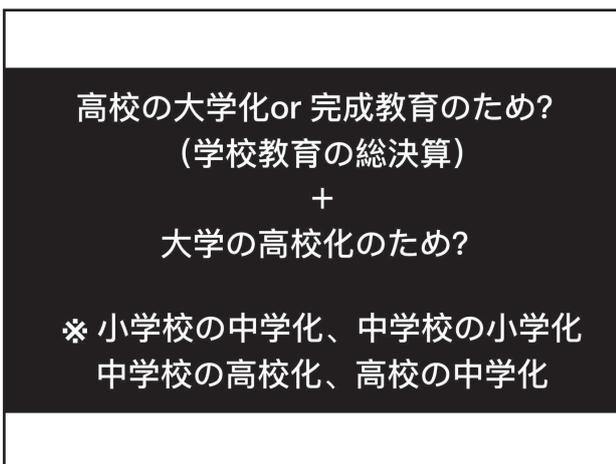
スライド 25



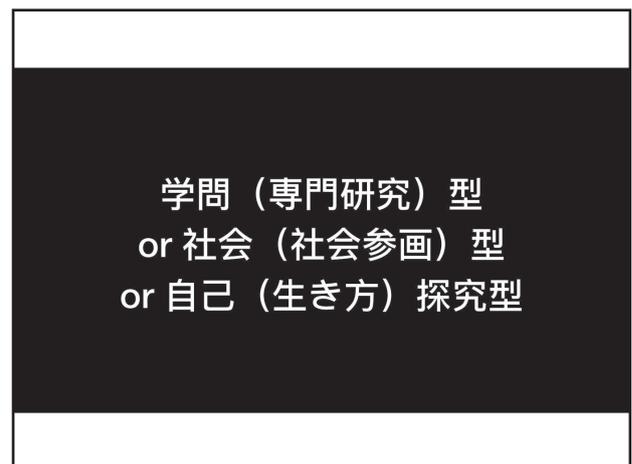
スライド 26



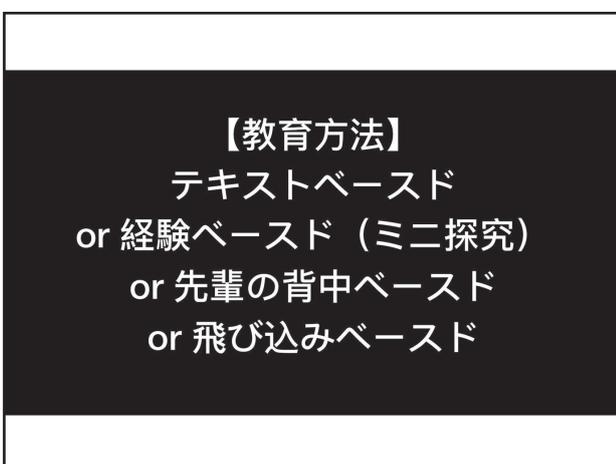
スライド 27



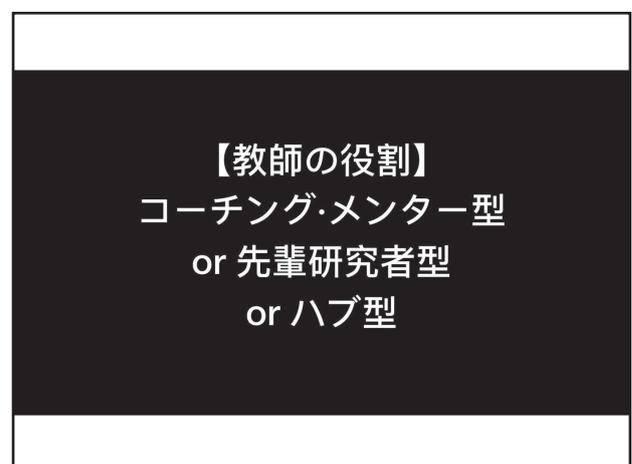
スライド 28



スライド 29



スライド 30



スライド 31

【カリキュラムマネジメント】  
リーダーシップ型  
or 教員組織体制構築型  
or 文化醸成型  
or カリキュラム発揮型  
or 外部連携協働型  
or 外部支援活用型

スライド 32



スライド 33

倉部さん

スライド 34

高大に挟まれ、モヤモヤ

スライド 35

1年100校周り、  
セグメント化実感。

スライド 36

進路指導主事  
↓  
3年以内58%、5年以内79%

スライド 37

地方国公立大学の魅力、  
後期試験を受けるための粘り強さ  
私立大学や推薦入試の話はしない  
でほしい、との依頼が多い。

スライド 38

小谷先生

スライド 39

舞鶴出身  
民間企業を経て、現職

スライド 40

DXハイスクール

スライド 41

地域未来学

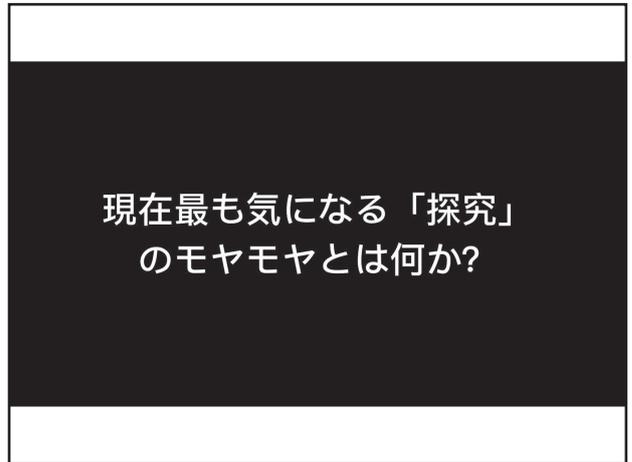
スライド 42

たくさんの探究プロジェクト  
と失敗した探究

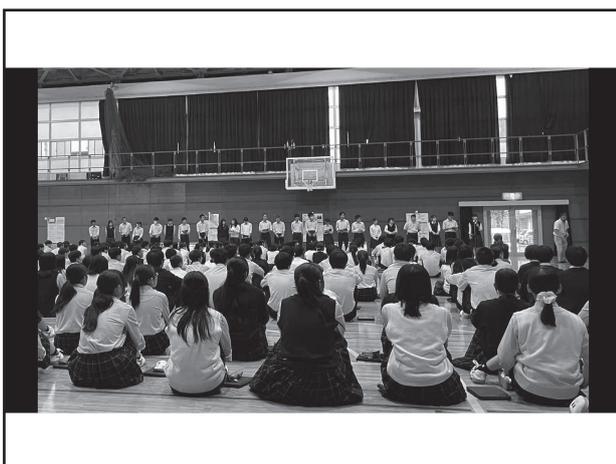
スライド 43



スライド 44



スライド 45



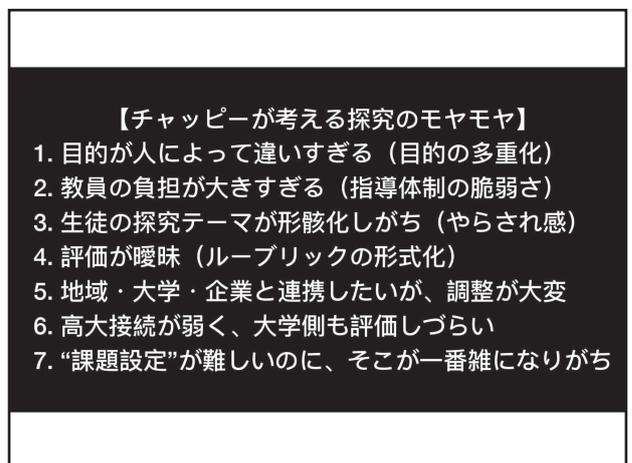
スライド 46



スライド 47



スライド 48



スライド 49

【松下先生のモヤモヤ】

- ・ 高校教員はどれだけの時間と労力を探究にかけるべき?
- ・ 大学教員は探究実践においてどのような役割を果たせる?
- ・ 高大接続のセグメントに拍車をかけることにならない? (特定教員への負担、体制づくり)
- ・ 探究があまりにも研究化しているのでは?

スライド 50

【倉部さんのモヤモヤ】

- ・ 特定の先生に負担が偏っていないか?
- ・ 指導体制の格差 (探究チームの有無)。
- ・ 研究化しすぎている探究の現状。

スライド 51

【小谷先生のモヤモヤ】

- ・ 探究 (部) の仕事が重い (と思われている)
- ・ 生徒一人ひとりの最適解にどう伴走できる?

スライド 52

【杉岡のモヤモヤ】

- ・ 大学の研究は研究費前提。  
高校の探究の予算は?
- ・ 部活動としての探究活動はなぜ広がらない?
- ・ 探究部長と進路部長のコミュニケーションは十分か?

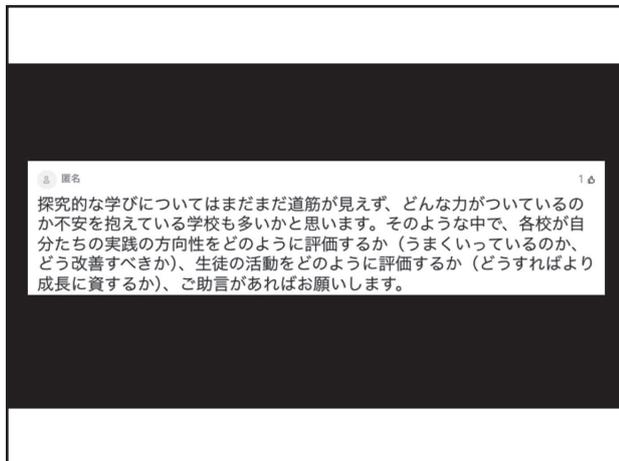
スライド 53

会場からの質疑

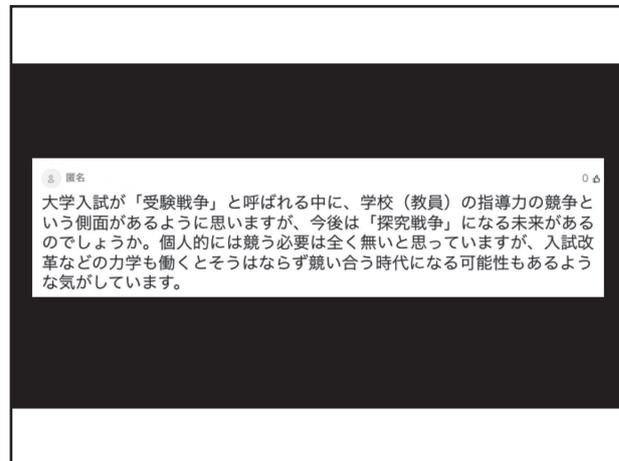
スライド 54



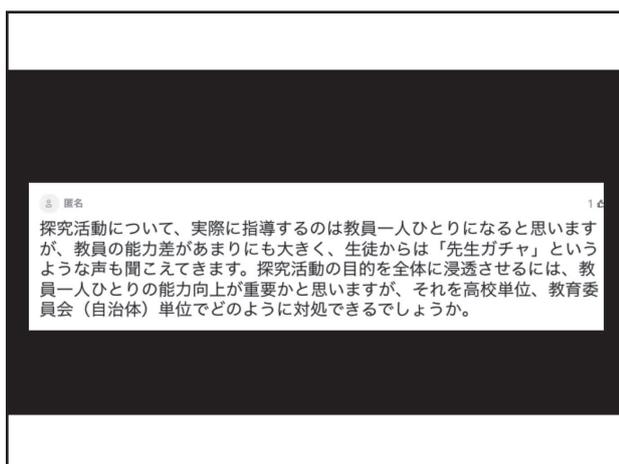
スライド 55



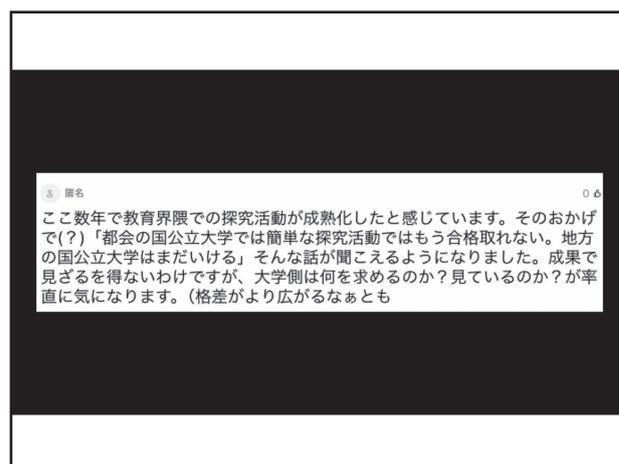
スライド 56



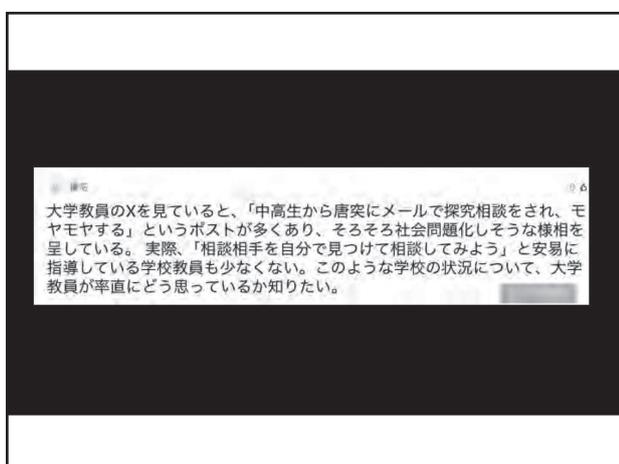
スライド 57



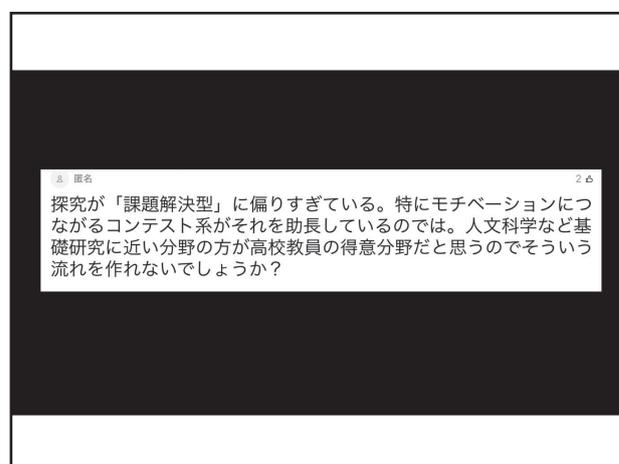
スライド 58



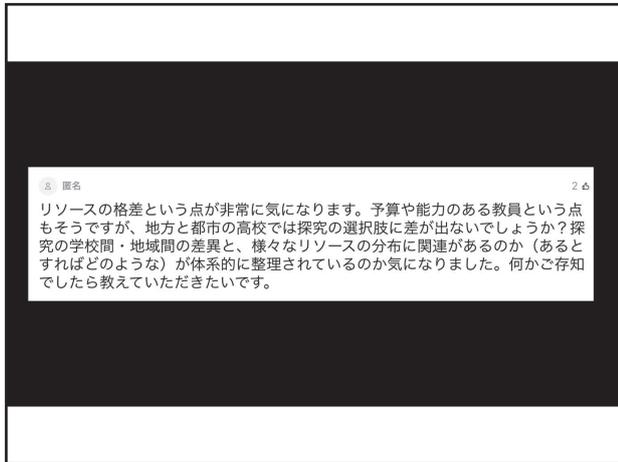
スライド 59



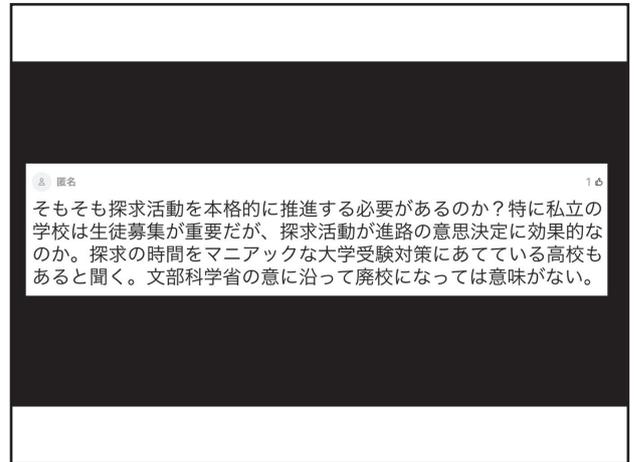
スライド 60



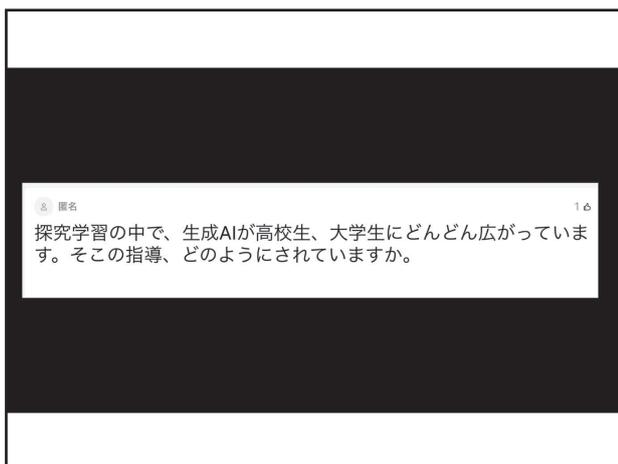
スライド 61



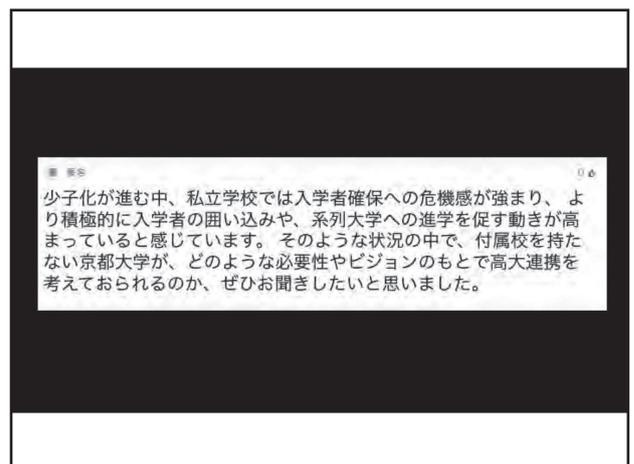
スライド 62



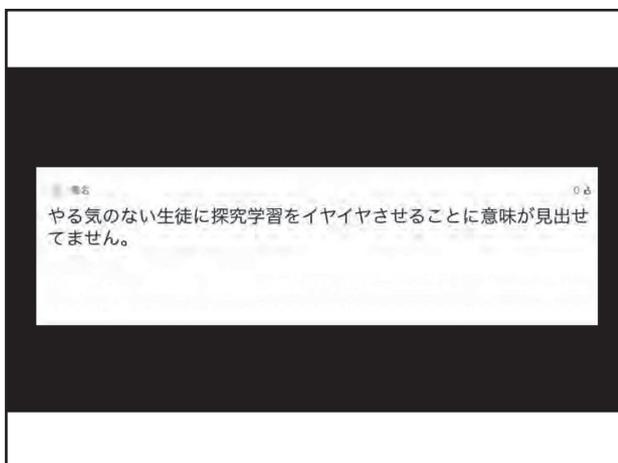
スライド 63



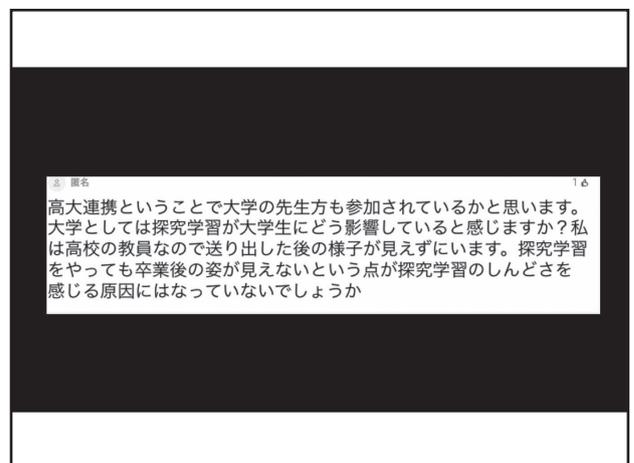
スライド 64



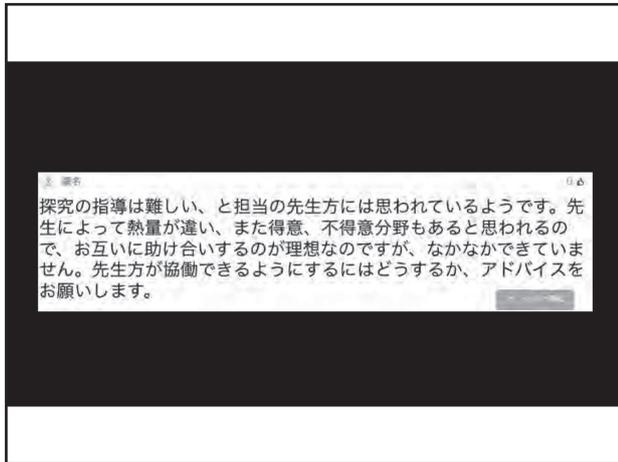
スライド 65



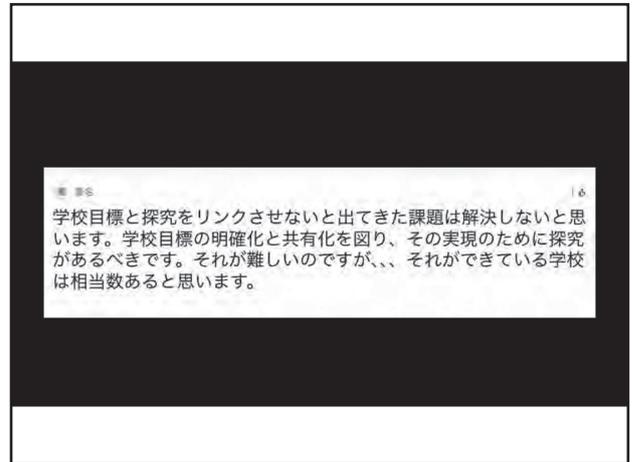
スライド 66



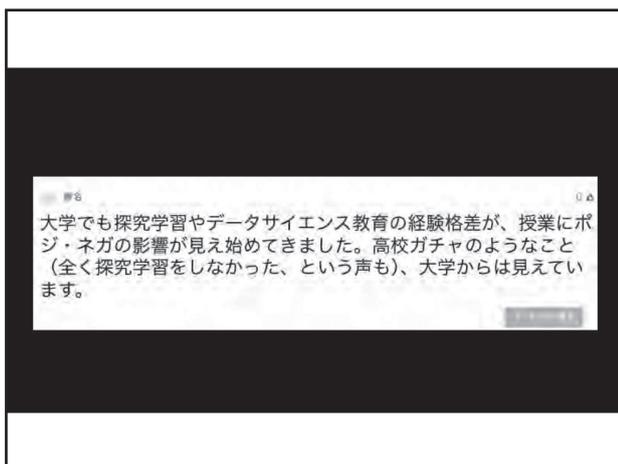
スライド 67



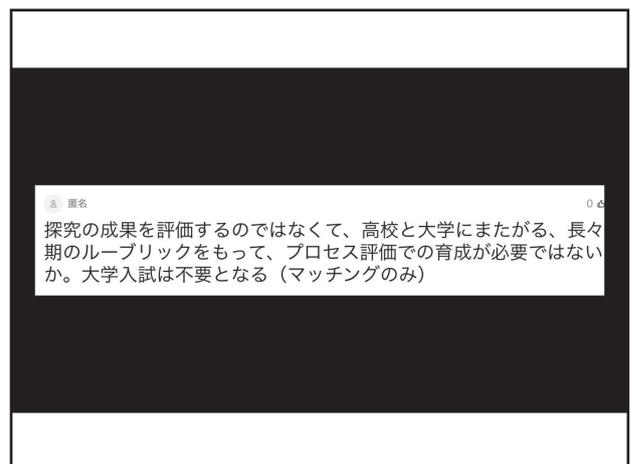
スライド 68



スライド 69



スライド 70



スライド 71



スライド 72

